
星屑明星～テイルズオブヴェスペリア～

月詠輝夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星屑明星（テイルズオブヴェスペリア）

【Nコード】

N8485Y

【作者名】

月詠輝夜

【あらすじ】

『僕はユーリのためならなんだって出来るよ』

大切なもののためならこの身を捧げることを厭わない、
帝国騎士団皇帝守護役の少女。

『ふたりに手エ出してみなよ。その時は僕があんたを殺してあげるからさあ！』

どんな敵が現れても絶対に守るんだ、
そう自分に言い聞かせてまっすぐ突き進む。
決して揺るがないその想いを胸に、後戻りはしないと誓った。

テイルズオブヴェスペリア二次創作小説。
自営サイトと重複投稿です。

※オリキャラが登場致します。
※傾向はユーリ寄り恋愛ギャグシリアス。
※オリキャラ設定は濃いです。

設定（前書き）

※かなり濃いです

※ネタバレ有

根は素朴でかなり傷つきやすい人
好きなものには一途で諦めが悪い
スマートな雰囲気を持ち主です
心の中はけっこうロマンチック
何年経っても夢を忘れない人

▼容姿

容姿端麗 中性的

どちらかという美人

薄い碧の髪は長く、腰辺りまである

髪は軽いウェーブがかかっている

左目は翡翠、右目は金色

金色の瞳の方は眼帯を着用

武醒魔導器は両手首にある

腰には武器の双銃のホルダー

▼備考

平凡(?)な貴族(公爵家)に生まれたが、瞳の色が違うために疎まれていた。

ほぼ毎日下町で暮らしていた為、ユーリとフレンと育ったようなものの。

ほんの少しだけクリティア族の血が混ざっており、ナギーグが使える。

しかし武醒魔導器を使用している。

魔導器は自分でユーリとお揃いがいいと無理にお願いして改造した。守護役という地位は騎士団長より上。

しかし実力はそれより下。

エステルに推薦され守護役になったために騎士団長よりは上らしい。満月の子の力と相反する力を持っている為、彼女の治癒術は効かな

い。故に逆も然り。

満月の子と相反するものの事を新月の子と呼ぶ。

それを知ったのはフェローと直接話をしに行ったとき。

小さな頃から迫害されてきたため、その力を無意識に封じ込めていた。

実は身体が成長するにつれ段々と漏れはじめていた。

新月の子はエアルを自分の体のように自由自在に操ることが出来、

エアルをマナに作り変えられる。

エステル同様精霊の声が聞こえる。

さらに召還することが出来る。

『だよ』など、語尾を癖があり、ユーリ曰くそれがふざけてるように見えるらしい。

甘えたがりで抱き着き癖がある。

貴族街から出て下町に來た時に助けられたユーリに一目惚れし、ずっとアタックしている。

フレンとは親友であり部下である。

ユーリにアタックしまくっておりいつも軽くあしらわれるが実はユーリも気があるご様子。

フレンもセアヴィラに気があるみたいだが彼女はユーリに一途。

運動神経は抜群なのだが、唯一水が怖くて水泳（泳ぐこと）が出来ない。

視力は両目共に2.0以上ある。

ユーリにしつこく付きまとう。

普段はかなりの温厚な性格だが、時にかなり冷徹になるときもある。ラピードにはなつかれている。

いつもへらへらとしていて、怒ってる時も怒っているのか分からない。

戦闘は銃自体が魔導器になっており、エアルを溜め込んで発泡する。

エアルさえあれば無限に出続ける弾。

それが魔法になったりもする。

以下夢絵

> i 3 5 7 6 2 — 4 0 6 1 <

戻る

戦闘ボイス

戦闘開始時

〔団体〕

『とつととちゃっちゃと行きますか!』

『んじゃいくよ』

『いっきまーす!』

〔味方＜敵〕

『うっわ…最悪だね』

〔味方＞敵〕

『お、楽勝楽勝』

『うん、楽できそう』

〔強敵〕

『ちょっと不安…』

『大丈夫、だよね…?』

〔瀕死〕

『ちょ、ちょっと休憩させて!』

『や、ヤバいんじゃないかな…』

「サプライズエンカウント」

『うっわ!!? 後ろから!!?』

『いきなりはやめてよね…!!』

「アドバンテージエンカウント」

『先制攻撃、行くよ…!!』

『おっ? これチャンスだよ♪』

戦闘中

「通常攻撃」

『ほっ』 『よっ』 『はっ』

『やっ』 『はあっ』 『食らえ』

「術技」

『これでも食らえ』 (攻撃術)

『おーい、大丈夫?』 (回復術)

『援護しまーす』 (補助術)

『あっ弱点発見』 (弱点)

『ちえ、これじゃないか』 (耐性)

『お、こんなのどうかな』 (新技発動)

「ダメージ」

『痛い！』 『うわっ』 『あだっ』

『いったあ！』 (クリティカル)

『ちよっと危ない…？』 (ピンチ)

『うえーヤバイんじゃない？』 (全滅寸前)

「ガード」

『全然！』

『甘いなあ』

「ブレイク」

『うわっ！』

『やっぱ…！？』

「戦闘不能」

『ユーリの…愛が足りない…』

『…不覚だったね…』

「仲間が戦闘不能」

『ふうん、覚悟はいーい？』

『もう許せないな』

『あは、殺しちゃうよ？』

「回復」

『平気〜？』

『回復だよ』

『戦闘不能回復』

『よっし、いくよ!』

『今度こそ…!!!』

『敵を倒す』

『次はどいつ?』

『やったね!』

『よしっ』

『アイテム使用』

『使うよ』(オート使用予告)

『よっ』(自分に使用)

『はいはい』(仲間を使用)

『やっばいいや』

(アイテム使用中止)

『逃走』

『あははーばいばい』

『挑発』

『僕に勝てると思ってる?』

『ばーかばーか!』

「オーバリーミッツ」

『僕、本気出しちゃうよ？』

「警告」

『詠唱中だってば！』

『敵の詠唱の邪魔してよ！』

『あははーヤバイかも』

『援護頼むね』

「バーストアーツ発動時」

『んじゃ、いっくよ！』

「秘奥義発動時」

『僕の本気の技、喰らってみなよ！！』

『痛い目、見てみる？』

+

『光の如く切り刻み、刹那に輝く旋律の戒めの刻印を示せ』
『闇に蠢く魂よ、聖なる刻印の元、その悪しき心を貫け』

+

『これで終わり！』

『口ほどにもないね』

「勝利」

>ポーズ<

[A] 銃を回してホルダーに仕舞う
[B] くるっと回る
[C] 髪の毛を払う
[D] 銃を空中に回し投げ、キャッチ
[E] 服の埃を払う
[F] 銃を回して前方に突き出す

[通常]
『よし、終わり〜』 [A]
『…バーン！なんてね♪』 [F]
『いーかんじ〜』 [B]
『ふう、終わった〜』 [C]
『んじゃ次、いってみよっか!』 [A]
『僕の勝ちだね〜』 [C]

[楽勝]
『らっくしょ〜』 [B]
『口程にもないね〜』 [F]
『楽勝すぎでしょ♪』 [D]
『まだまだ行けるね!』 [A]
『相手、間違えたね』 [C]
『あはは、楽勝〜』 [B]

[辛勝]
『お疲れさま〜』 [E]
『ちよっとヤバかった?』 [C]

『あつぶなあ…』 [F]

『ギリギリってとこかな』 [A]

『油断しちゃダメだね』 [B]

『うーん…微妙だなあ』 [E]

〔秘奥義〕

『僕の実力、思い知った？』 [C]

『このまま行っちゃうよ！』 [D]

『これは誰かを守る力…』 [F]

『よっし、いい感じ』 [C]

『決まった？決まった！』 [A]

『僕って最強だよねえ』 [B]

〔対人戦〕

『情なんてかけないからね』 [D]

〔スキルマスター〕

『うん、いい感じだね！』 [B]

『次、行ってみよう！』 [F]

『また強くなっちゃった♪』 [A]

〔レベルアップ〕

『己をさらに磨け、ってね』 [A]

『僕はまだまだ強くなりたい』 [C]

『誰かを守る力が欲しいよ』 [E]

称号

称号

※随時更新

＊帝国騎士団護衛役「初期称号」

「騎士団長よりも地位の高い役得。大切な姫君を、親友を護衛するのが僕の役目です。」

＊一途な乙女心

「恩人のユーリが大好きで大好きで仕方ないご様子。その他の男には目もくれないのだ。」

＊闇夜の暗殺者

「僕が君の罪を背負おう。君が辛くないように。…僕は、君のために。」

＊公爵家ご令嬢

「公爵家に生まれたが、片方が金の瞳の所為で疎まれ、虐げられ、生きてきた。」

＊ポジティブっ子

「どんなことがあっても明るく元気に。パーティーのムードメーカー。」

＊始祖の隸長の姫君

「新月の子と言われる彼女は始祖の隸長の姫と崇められる存在、らしい。」

＊乱れ舞う戦場の姫君

「ひらり、ひらり、と舞いながら双銃を撃ち、戦場を駆け抜ける姿はまるで舞姫のよう。」

＊魅惑の姫君「コス…ドレス」

「ふんわりとまるでお姫様のような格好。僕にこんな似合うと思ってんの!？」

＊自己犠牲者

「誰かのために自分を犠牲にするのは自分自身が決めたこと。なのにどうしてか迷ってしまう。」

＊純白天使「コス…天使」

「聖夜にプレゼントを運ぶのはサンタだけではない。天使が運ぶ優しき贈り物。」

＊何でも料理人

「庶民のものから高級なものまで何でもお任せ！ある意味料理は趣味ですから。」

＊大胆誘惑レディ「コス…タオル一枚」

「お仕事中でもお構い無し！大好きなあなたをタオル一枚で誘惑しちゃう」VVVV

＊魅惑の花の精「コス…水着」

「桃色の際どい水着は大好きな彼を誘惑するために…？」

術技

〔術〕

攻撃技は全て銃から魔法を放つ

□ファイアボール

「ゆらめく焰

□アイシクルレイン

「氷の刃よ 降り注げ

□イラプション

「燃え盛れ 赤き猛威よ

□ウインドカッター

「切り刻め

□エアスラスト

「風よ 刃の如く切り刻め

□プリズムソード

「断罪の剣よ 七光の輝きを持ちて降り注げ

□ ロックブレイク

「狂乱せし 地霊の宴よ

□ グランドダッシャー

「大地の咆哮 それは怒れる地竜の双牙

□ ライトニング

「雷よ 降り注げ

□ ホーリーランス

「光よ 邪悪を滅ぼす槍と化せ

□ イラプション

「火焰の帝王、地の底より舞い戻れ

□ スプレッドゼロ

「たゆたう闇の微笑

□ スプラッシュ

「汚れなき汝の清浄を彼の者に与えん

□ アクアレイザー

「蒼き命をたたえし母よ、破断し清冽なる産声をあげよ

□ フォースフィールド

「絢爛たる光よ、干戈を和らぐ壁となれ

□ サンダーブレード

「雷雲よ 我が刃となりて 敵を貫け

□ インディグネーション

「天光満つる所に我はあり

黄泉の門ひらく所に汝あり 出でよ 神の雷

□ ファーストエイド

「優しき癒しの光よ

□ ヒーリングフォース

「再生の力よ 宿れ

□ ヒールストリーム

「優しき癒しの地よ

□ リザレクション

「万物に宿りし生命の息吹を此処に

□ フィールドバリアー

「彼の者たちにさらなる守りを

□ シャープネス

「刃にさらなる力を

□ アグリゲットシャープ

「彼の者たちに強靱なる力を

□ エスプレイドイレイズ

「すべての変動を打ち消せ

□ ジャッジメント

「輝く御名のもと 地を這う穢れし魂に裁きの光を雨と降らせん

安息に眠れ 罪深き者よ

□グランドクロス

「霊冥へと導く破邪の煌めきよ 我が声に耳を傾けたまえ 聖なる
祈り 永久に紡がれん 光りあれ

□サクリファイス・ジャッジメント

—「秘奥義」

—光の如く切り刻み、刹那に輝く旋律の戒めの刻印を示せ
「天から何億もの光の雨を降らせ、地に十字架を刻む



「技」

□フレアショット

「連発で左右の銃から交互に連射し、爆発の勢いで相手を奥へ押しやる

□アクアバレット

「両手をクロスさせ、双銃から同時に弾を打ち出す

□スカーレット

「左へ移動しながら連射で攻撃

□ミスティアーク

「双銃で地面に向けて放射状に掃射する

□テイルトリート

「敵の足下に弾を打ち込んで爆発させ、高く浮いたところを連射で追撃

□レールアロール

「後方に跳んで距離をあげつつ、光線を連射して敵を撃つ

□ガトリングバレット

「宙に舞い、回転しながら十二発の弾を撃ち込む

□シャイニングレイザー

「交差させた銃口から光弾を撃ち出す秘技

□クロスミラージュ

「双銃から同時に銃弾を発射し、敵にヒットするとエネルギーが拡散し、周囲の敵を巻き込んでダメージを与える

□クラックビースト

「獰猛な獣のごとき銃弾を二発同時に発射する

□オールザウェイ

「前方に氷の弾丸を乱射

□ツインバレット

「バックステップして拳銃を放つ

□ パワーショット

「一発に高い攻撃力を込めて発射する

□ バーストショット

「瞬時に空中に飛び上がり、回転しながら敵に攻撃する

□ バスターショット

「無属性の弾を敵に打ち込む

□ シューティング・ヴェスペリア [秘奥義]

「闇に蠢く魂よ、聖なる刻印の元、その悪しき心を貫け

「双銃から全ての属性の銃弾を天に向かって打ち上げる。直後、まるで星のような無限の数の銃弾が降り注ぐ。

00 少女と月夜の出会い

世界は

どうしてこうも

醜いんだろうか

帝都ザーフィアス。彼女はその貴族街で育った。けれど双方の瞳の色が違うと言うだけで疎まれ、虐げられ、生きてきた。まだ十にも満たない彼女にはその環境は地獄でしかなかった。そんなある日、少女は決意した。ここを出てやるんだ、と。今まで家から出たことの無い彼女にとって外とは未知の世界だった。

家族や使用人が寝静まった頃、少女はこっそりと自室の窓から抜け出した。しかし外に出たことの無い彼女は貴族街の出入口に門番がいることも知らず、そのまま貴族街の外に出てしまったのだ。

「貴女はセレーネ様のご息女の……!!」

『!!!』

「あっ、待ちなさい！」

気付かれた門番から逃げるように走る。裸足で出てきてしまったので、結構足が痛い。けどあそこには戻りたくない。いたくない。だから我慢して逃げるしかなかった。

しかしどうも街の中は複雑で、どこに行けばいいのか分からず途方に暮れていた。その時、ふとある坂が目に入る。かなりの傾斜の坂だったが、もしかしたら下に、外に繋がっているのではないかと思った。行くか行くまいか迷っていたが、後から近付く鎧の音に、ビクリ、と身体が跳ね、自然と足はその坂を下っていた。

「お待ち下さい!!」

『……!!』

いつの間に連絡が行ったのか、下の坂からも追っ手が迫っていた。前を見ても後ろを見ても逃げ道はない。ああ、またあの孤独で寂しい部屋に戻されるんだ。そう思ったとき、突然坂の下の方の騎士が倒れた。きょとん、としていると、誰かに手を引かれる。暗くて？誰か？の顔は見えなかった。

「来い！！」

『わ…っ！！』

ぐいつ、と引っ張られ、慌てて体勢を立て直す。彼女はされるがままについていく。暗くて辺りなんてうっすらとしか見えないはずなのに、複雑な道をすいすいと進む。そしてあっさりと追っ手を撒き、足が止まった頃には息が切れていた。見ればここはどこかの部屋だった。

「ふう。大丈夫か？」

『え、あ……っ』

部屋に月明かりが差し込む。するとここまで引っ張ってきてくれた人物の姿が目に入る。それは女の自分から見ても綺麗だと思える容

姿だった。

黒く長い髪に整った顔。そんな彼に思わず顔が紅くなる。――彼女は彼に一目惚れをした。しかし次の瞬間、彼の目が見開かれる。少女はハッとし、自分の左目を繋がれていない片手で押さえた。

「お前…その目…」

『……見ないで』

「!……俺は綺麗だと思うな。月みたいな金色の瞳」

その言葉に少女は驚いたように立ち尽くす。そんな事を言われたのは初めてで、思わず彼に見とれていた。すると彼は目を隠していた少女の手をそっと外す。それで現実に戻った彼女は、ふいつ、と顔を反らした。

「お前、なんで追いかけてたんだ？」

『……』

「っと、その前に自己紹介だったか。俺はユーリ・ローウェル。お前は？」

『…僕は、セアヴィラ…。セアヴィラ・ディアナ・セレーネ…』

彼女、セアヴィラが名乗ると再び、ユーリと名乗った少年の目が見開かれる。それに気付いた彼女は慌てて口を塞いだ。

セレーネといえば帝都でも名の知れる大貴族、公爵家なのだ。もしかしたら騎士団に連れて行かれるかもしれない。そう思うと勝手に身体が動いて逃げ出していた。しかし未だに手を繋いでいたセアヴィラは難なく彼に引き留められ、ベッドへと押し倒される。

『っ！！』

「落ち着け。大丈夫だ。通報なんかしやしねえよ」

『え…っ?』

「何か理由があるんだろ?話してみろよ」

彼に真っ直ぐ見つめられ、ドキッ、としながらも、こくこくと頷いた。

——それからセアヴィラは今までのことを全て話した。その間、ユーリは黙ってそれを聞いてくれた。

『…だから、追いかけてたんだ』

「…そうだったのか」

『あのっ、…さっきは、ありがとう…助けてくれて…っ』

「いや、気にすんな。それよりお前、これからどうするつもりだ？」

ユーリに聞かれ、きよんとする。確かに家を出ても行くところがない。結界の外に出れば魔物もいると聞く。しかしこのまま戻るわけにはいかない。

どうしようかと迷っていると、彼がセアヴィラの頭に手を乗せる。

「行くとこねーんなら暫くここにいろ」

『！…いいの？』

「ああ」

『つユーリ大好き!』

「!?!? ちょ、?セアラ?!」

かばっ、と彼女はユーリに抱き着くと聞きなれない言葉を耳にする。首を傾げてそれを何度も繰り返して呟いていると、彼は笑う。

「セアラ。セアヴィラなんて長ったらしいし、そう呼ぶぜ?」

『!?!? うん…うん、ユーリ!』

彼女は嬉しくなっただけでまたユーリに抱き着く。そんなセアヴィラに彼は頬を微かに染めた。

「ユーリ、さっきから煩いんだけ、ど…」

「フレン!」

そんな中、誰かがユーリの部屋に入ってきた。

フレンと呼ばれた少年はセアラを見て言葉を失う。未だ抱き合っている二人は何故彼がそんなにも目を見開いてるのか分からず首を傾げていた。

『誰?』

「ああ、俺の幼馴染み。フレンっつーんだ」

『へえ…で、なんでフレンは固まってんの?』

セアヴィラとユーリはそのままの状態で話しを続ける。彼女が自然とフレンの名前を呼ぶと、彼はやっと我に戻った。

「な、何でもないよ…（み、見とれてたなんて口が裂けても言えない…）」

『ふうん…僕はセアヴィラ・ディアナ・セレーネ。よろしくねフレン』

「セレーネ…!?!?」

フレンの驚きようにセアヴィラは、またやつちやった、と眉を潜めてユーリに視線をやる。

「大丈夫だ。な、フレン」

「なっ何が大丈夫なんだ！セレーネと言えば…」

「はいはいちゃんと事情は話すから取り敢えず落ち着けて」

宥めるようにユーリが言うと、さっきの慌てようが嘘のように、彼は押し黙った。そしてユーリは事のあらましを全て話す。するとフレンも納得してくれたようでセアヴィラはほっと胸を撫でる。

「そう言うことなら僕もここに置いてあげるのには賛成だよ」

『ありがとう…!!』

「「！」」

セアヴィラは嬉しそうに満面の笑みを浮かべる。それはとても綺麗で、二人は暫く彼女の笑みに見惚れていた。

「じゃ、じゃあ女将さんに頼んで一部屋貸してもらお…」

『僕、ユーリと同じ部屋がいいっ』

フレンの言葉を遮り、セアヴィラはユーリに抱き着き直しながら言う。

「え!?! ちょ、それは…」

「俺は別にいいけどな」

焦るフレンとは裏腹に、ユーリは心なしか嬉しそうに呟く。それに落ち込んだ彼に、セアヴィラは悪気もなしに笑顔になった。

『あ、なんかお手伝いすることがあったら言ってね!』

「まあ手伝うのはいいけど、外に出るなら騎士団に見つからない程度にしとけよ?」

『分かってるよ』

先程会ったばかりだと言うのにこんなにも馴染めるのはきつとユーリのお陰なのだろう。こうやって同じ子供と接することの無かった彼女に初めての友達が出来た瞬間だった。

……数年後。

街の結界の外。そこに、腰に二丁の拳銃を携え、長く綺麗な緑の髪を風に靡かせている女性が立っていた。

『…ザーファイアス』

彼女は目の前に聳え立つ帝都を見上げた。

『っ任務完了♪やあっと帰って来たよー！エステリーゼさまへの土産話も持ってきたし……あ、先にユーリに会いに行かなくっちゃユーリくっ待っててねー！』

彼女は周りにハートを撒き散らし、桃色のオーラを醸し出しながら
帝都の下町への門を潜った。

『ユーリっユーリっ』

端から見れば可笑しいと見られる彼女だったが、いつも下町の住人はそれを微笑ましく見る。しかし途中でその歌は途切れた。いつもの下町とは何かが違う。目の色を変えた彼女は駆け足で下町の坂を上る。

すると広場の噴水が暴走しているのが目に入った。その周りには下町のみんなが懸命にそれを止めようと作業をしている。

『何、これ……！』

ふと噴水の中心に目をやると、そこにあるはずのコアが無くなって
いたのだ。状況が分からない彼女は馴染みあるハンクスの元へ駆け
寄った。

『ハンクスじっちゃん！この騒ぎ、一体なんなの！？』

「おおセアヴィラ、帰ってきたのか！実は水道魔導器が壊れて、モルディオと言う貴族に直してもらったんだが…またぶっ壊れてしまっただけ。どうやらそこにあったコアが無くなったのが原因らしい…
——それで今ユーリが貴族街へ行つとる」

『ええ！？ユーリいないの！？』

「Σそっちなか！！…ったく、相変わらずじゃの。…そうじゃセアヴィラ。あいつが無茶しないように見に行っちゃくれないか」

『はえ？めっさその気だったけど』

「ああすまんそう言う奴だったなお前は」

あはは〜と笑いながらセアヴィラは背伸びをして歩き出す。向かうは彼女の生まれた場所、貴族街。不本意ではあるがちゃんと家には帰ってたりする。そんな彼女にとって下町は育った町とも言える。貴族であるセアヴィラを疎みもせず暖かく迎えてくれる。

ここはセアヴィラの大切な町なのだ。

『さーってと…ユーリ探さなきゃ！』

それから、僕の大好きな町を滅茶苦茶にした奴は……ぶっ飛ばさ

ないと気が済まないな』

爽やかな（黒い）笑顔を浮かべてセアヴィラは帝都の広場へ続く坂道を上っていった。

月夜の出会い

（運命の出会い、なーんてねっ）

00 少女と月夜の出会い（後書き）

夢主はユーリ大好き、ユーリ依存症な、ヤンデレっ子です（＾Ｏ＾）
J

01 暗殺者と癒えない傷

僕は大好きな人も

大切な親友も

守りたい

例え自己犠牲と言われても

彼女、セアヴィラは貴族街の入口に立っていた。そこには門番が二人倒れており、近くには少し大きめの小石が落ちていた。そしてその奥では何やら騒ぎになっているようだ。彼女が一步踏み出したその時、逃げるように馬車がこちらに向かってきた。

『う、わっ!?!』

突然のことに、避けられないと思ったセアヴィラは真上に飛び上がり、通り過ぎる馬車の屋根に手を付いて飛び越えた。上手く着地した彼女は去っていく馬車を振り返る。

『あつぶないなあもう!』

「こりゃ馬車はもう無理だな」

『! ! ユーリィVV』

叫ぶと同時にユーリの声が聞こえてき、彼女は馬車のことなんて直ぐに忘れて前を振り返る。そして急いで声が聞こえた方へと歩を進めた。

『ユー…!』

しかし同時に嫌な人物が目に入り、浮かれた気分はどこかへ行く。

『キュモール…』

「おや、セレーネ嬢。お帰りになられていたんですねえ。丁度良い。あなたも手伝って下さい。あそこのユーリ・ローウエルを捕まえるのを」

キュモールは今は空き家の貴族宅の前で騎士たちに囲まれて蹴ったり殴られたりしているユーリを指差す。彼女は燕尾服のような服の裾を翻し、彼らの方へと歩いていった。

『あゝんゝたゝらゝ！！』

「Σ！！！」

『僕のユーリに何してんだああああああ！！』

ダダダダダダ！

セアヴィラは腰のホルダーから双銃を取り出し、それをユーリに当たらないように騎士たちに連射した。

「ああそうだったよセレーネ嬢はユーリ・ローウェルに心底お熱だったね」

キュモールはそんな彼女を呆れたような目で見ていた。

『僕のユーリを傷物にしてただで済むと思っ
てないよね!?!』

「ちょ、待つ、セレーネさま……うわぁああああ!?!」

「相変わらずだよな、セアラって。騎士団の立場考えてねえし」

またユーリも同じように騎士たちに連射するセアヴィラを見ていた。

やがて彼女は数人の騎士に取り抑えられ城の自室へと連れていかれ、ユーリは牢獄へと放り込まれた。

『結局ユーリと話せなかったし! あーもう! ユーリの愛がた〜り〜な〜い〜!?!』

ベッドの上でそんなことを口にして枕に顔を埋めながら足をバタバタさせる。そんな時、ドンドンドン、と慌ただしく部屋の扉が叩かれた。

『な〜に？ 僕今報告書書いてんだけど〜？』

出るのが面倒で嘘を吐く。

「すみませんセレーネ様！！ご報告です！エ、エステリーゼ様が城を抜け出そうと城内を逃走中で……！！！」

『！』

その言葉を聞いたセアヴィラは直ぐにベッドを降りてブーツを履き、燕尾服に似た服を着て扉を開いた。

『今行く』

緑の髪を鬱陶しそうに払うと、セアヴィラは直ぐに城内を搜索し始めた。

――
――
――

「もう、お戻りください」

「今は戻れません！」

騎士と少女のそんな声が響いた。

『エステリーゼ様……？』

遠くで聞こえたかなり小さい声だったが、聴力が良いセアヴィラには大体どこから聞こえてきたのか把握した。

『逆だったなあ』

小さく呟いて彼女は踵を返して走り出す。暫くすると剣撃の音までもが聞こえてきて、セアヴィラはスピードを上げる。

「ユーリ・ローウェル！どこだ〜！」

「不届きな脱走者め！逃げ出したのはわかっているのだ〜る」

その声に、うげ、と心底嫌な顔をした。いやいやそれより、ユーリは脱走したのか。

『流石僕のユーリVV』

「誰がおまえのだ」

『Σぎゃあ！！ってユーリっVV』

どうやら自分の世界に浸っている内に目的の場所へついたようで、急に目の前にユーリの姿があり、ユーリ不足な彼女は思わず抱きつ

いた。

『は…：幸せ…：v v v v』

「おーい、戻ってこーい」

「セアヴィラ…！」

『！あ、見つけました！』

セアヴィラの視線の先には桃色の髪をし、美しいドレスを着た少女。彼女こそがセアヴィラが探していた人物だ。

「セアヴィラもわたしを連れ戻すんですか？」

『あなたが理由を話して下さって、それが僕に理解出来るなら、僕はあなたの気持ちを尊重したいです』

「…――実は」

『おっと、取り敢えずここからは早く離れましょう。歩きながらお願いします』

未だ彼女はユーリの腕に抱きつきながらエステリーゼに提案し、ユーリも仕方なしにセアヴィラたちに付き合う事になった。

「そう言えばあなた、ユーリって…もしかして、セアヴィラやフレンのお友達の」

彼女らは歩きながら話す。

『うん、恋人VVVV』

「誰が恋人だ」

バシッ

満面の笑みで言う彼女はユーリにしばかれた。セアヴィラは地味に痛む頭を擦る。

「ま、友達だけど」

「なら、以前は騎士団にいた方なんですよね？」

「ほんの少しだけけどな。それ、コイツとフレンに聞いたの？」

ユーリの問いかけにエステリーゼは頷く。すると彼は物珍しそうにセアヴィラを見た。

「ふうん、おまえにもあいつにも城の中に、そんな話する相手いたんだな」

『僕は誰にでも話してるよ』

「ああおまえはそうだったな」

真顔でさらっと言う彼女をユーリは軽くあしらう。その時、暫く何かを考えていたエステリーゼはユーリとセアヴィラの前に出てきた。

「あの、セアヴィラ、ユーリさん！それでフレンのことなんですけど…」

『フレン？』

「ちよい待った。あんた一体、なんなんだ？フレンとコイツの知り合いなのはわかったけど、どうして騎士団に追われてんだよ」

『まあまあユーリ。取り敢えずまずはフレンのどこまで案内しますね。その方が話が早いようすし』

「あ、はい！」

なんかコイツのペースに乗せられたな、とユーリは頭を掻きながらフレンの部屋目指して彼女たちの後を追った。

「この辺り…だったような…」

「…あんたの立ってるそこがフレンの部屋だろ…？」

やがてフレンの部屋の前に辿り着き、三人は扉に手を掛けて彼の部屋に入った。しかし部屋はやけに片付いていて、フレンはどこかへ遠出していることが分かった。

『あちゃ〜…』

「そんな…間に合わなかった」

エステリーゼは項垂れる。そんな彼女をユーリは振り返る。

「んで、一体どんな悪さやらかしたんだ？」

『ちよ、ユーリ』

「どうして？わたし、何も悪いことなんてしてません」

「なのに騎士に追いまわされるのか？常識じゃ計れねえな、城ん中は」

セアヴィラは迷った。彼女の立場を言うべきか言わざるべきか。

「あの！セアヴィラ、ユーリさん！」

突然彼女は叫ぶ。

『?』

「なんだよ急に」

「詳しいことは言えませんが、フレンの身が危険なんです!わたし、それをフレンに伝えに行きたいんです」

『フレンを…それって…——』

「行きたきゃ、行けばいいんじゃないのか?」

セアヴィラの言葉を遮るようにユーリがそう告げる。

「それは…」

「オレにも急ぎの事情があつてね。外が落ち着いたら、下町に戻りたいんだよ」

ユーリはエステリーゼをあしらうように話す。そんな彼にエステリーゼが駆け寄る。

「だったら、お願いします。わたしも連れて行ってください。今のわたしにはセアヴィラとフレン以外に頼れる人がいないんです」

『ええ！？城を出るってことですか！？』

「はい。セアヴィラ。心配ならあなたもついてきて下さればいいですから」

セアヴィラは彼女に攻め寄せられ、立場的にそれを断れなかった。眉間に皺を寄せてユーリを見ると、仕方なさに溜め息を吐いていた。

「わけありなのはわかったからせめて名前くらい聞かせてくんない？」

「あ、はいっ」

エステリーゼが彼に言おうとした時、突然扉が吹っ飛んだ。何事かと思ひ扉の方へ目を向けると、そこには何とも奇抜な髪をした男がニヤニヤしながら立っていた。

「オレの刃のエサになれ…」

彼を見たセアヴィラとユーリは溜め息を吐き、お互い武器に手を掛けた。エステリーゼは反射的に後ずさる。

「ノックぐらいしろよな」

「オレはザギ…おまえを殺す男の名、覚えとおけ、死ね、フレン・シーフォ…！」

『ユーリをどっからどう見たらフレンなんだよ！』

彼女はいち早く双銃をぶっ放した。しかしそれは容易く避けられる。

「そうそう、人違いだったの」

「死ね」

ザギは容赦なく斬りかかってくるが、ユーリはそれを素早く刀を鞘から抜き、軽々と止めた。

「ちったあ人の話聞いた方がいいぜ」

「ザギだ。オレの名前を覚えておけ、フレン」

「フレンじゃねえよ、聞け！」

ユーリは力でザギを押し返す。それを狙ってセアヴィラが銃を撃つが、ギリギリ避けられ彼女は舌打ちをする。

「ククク、何だよおまえ」

「おまえこそ何だよ」

『僕を無視すんな！！』

狙って双銃を撃つ彼女だったが、彼の動きが素早く中々当たらない。イライラしたセアヴィラは左目に付けた眼帯を取る。

「オレはおまえを殺して自らの血にその名を刻む…！」

「最高に趣味悪いな」

『悪すぎ、でしょ』

両目で敵を定め、ドン、と一発彼の腕に銃弾を撃ち込んだ。ペロリ、と口元を舐め、ザギを見やるとようやく彼はこちらを見た。

「楽しく、楽しくなってきたぞ…」

『はっ！余裕ぶっこいてんのも今のうちだよ。侵入者は徹底的に潰さないかね！！』

「行くぜ、セアラ」

『うんVV』

ユーリの声に彼女は銃を構え直す。前衛にユーリ。彼は蒼い斬撃を繰り出す。それに続いてセアヴィラが双銃から交互に弾を連射し、それが着弾すると爆発する。

『行っけェ！？フレアショット?!!!』

「?蒼破刃?!」

次に放った二人の技は見事ザギに命中した。しかしそれによって発生した煙により、視界が悪くなる。そこから二人の攻撃を食らったはずの彼が飛び出して来るなんて思わなく。

「なっ」

『ユーリ!!』

ザシュ!

『っ!』

「セアラ……!」?

飛び出して来た彼に咄嗟に反応したセアヴィラはユーリとザギの間に立ち塞がり、ユーリの代わりに刀を受けた。裂けた肩からは止めどなく血が流れ出す。

『（っこいつ…無茶苦茶だけどかなり強い…!!）でも負けるなんてありえない。こんなんじゃ守護役の名が廃るよ…!!』

「セアラ、おまえ馬鹿か」

『! ユーリ…』

セアラは傷口を強く押さえ、銃を構える。それを見たユーリは傷付いた彼女を守るように背に庇う。

「いい感じだ」

「はあ？何がだよ。こっちはちっともよくねえよ」

「いいな、その余裕も」

『あんた何かに僕らが負けるわけないじゃん』

ニツ、と笑って銃口をザギに向けると、彼は狂ったかのように笑い出す。

「あははっ!! さあ、上がってキタ!! 上がってキタ!! いい感じじゃないか!!」

「急に変わりやがったな」

『ユーリ以上の戦闘狂だね』

「おまえが言うか？」

セアヴィラは傷口から手を離し、そうかなあ、と笑って誤魔化する。

「あはははははっ!!」

ザギは哄笑し、こちらに向かってくる。ユーリは剣で剣を、セアヴィラは銃で彼の蹴りを止めた。

「くっ」

「わたしもお手伝いします!」

『ダメです!』

「くるなっ！」

見ていられなくなったのか、エステリーゼが駆け寄ってき、二人は同時に力でザギを弾く。

「でもセアヴィラだって怪我をしていますし！」

「ああ、いいぜ！何人でも掛かって来い！」

「：無理しねえでやばくなったら退けよ。治癒が出来んなら先にこいつを見てやってくれ」

『ちよつとユーリ！』

「はいっ！」

ユーリに言われ、エステリーゼはセアヴィラの方へと駆け寄る。彼女がここに立つことは嫌だったが、セアヴィラは彼女の強い意思に折れた。

「簡単に終わらせないでくれよ？こんな闘いは久しぶりなんだからなあっ！！」

「まったく、本気でなんなんだよこいつ…」

「セアヴィラ、大丈夫です？」

『僕なら大丈夫です。それより僕より前には出ないでくださいね』

「そんなことより先ずは傷を…」

痛々しい肩の傷に彼女が手を翳すと淡い光が傷を癒す、ハズだった。エステリーゼは治っていない彼女の傷に目を見開いた。同じようにセアヴィラも驚く。

「ど、どうして…!?!」

『わ、分かりません。…取り敢えず、今は向こうに集中します。傷は後で自分で治しますから』

「は、はい…!」

しかし――――

『っ!?!?』

突然セアヴィラは膝を着く。まるで身体の中で何かが這いずり回っているような感覚に襲われた。

「セアヴィラ!?!」

『っ何でもありません!下がって下さい!』

セアヴィラは気持ち悪さに耐えて、再び双銃を持ち直す。その数歩後ろではエステリーゼが剣と盾を持って構えた。

「ひやははは!楽しいじゃねえか!」

ユーリは彼の攻撃を受け続け、ザギを見ていたエステリーゼがユーリに、落ち着いて、と告げる。

「ああやってこっちのペースを乱そうとしてるんです」

「おまえが落ち着け。あいつにそんな深い意図ねえって」

「え、じゃああれが素なんです？」

『完璧素ですねぇ』

銃を撃ち、前衛の彼の援護をしながら話す。後ろのエステリーゼも回復術でユーリの傷を癒している。

「ごちゃごちゃ喋ってたら死ぬぜ、フレン」

「だから人違い……って話しても無駄っぽいな！」

「で、でも誤解なら戦いより話し合いの道を……」

『いや、どう考えても無理ですよ』

この状況じゃ話し合いも何も出来ないだろう。その上相手が全くこっちの話を聞いてくれない。彼女らは何度も向かってくるザギの攻撃を受けたり、避けたりしながらこちらにも攻撃をする。

「あははは！オレと会ったが運の尽きだ！」

「セアラの言う通りだな。話し合いが出来る状態じゃねえよ。倒しちゃった方が早い！」

『そうだよ、ねエ！！』

ドン！！

再びセアヴィラの銃弾がザギの身体を貫く。しかし致命傷は避けられたようだ。

「っは、強えじゃねえか！…ひゃひゃひゃひゃ！！痛え！痛え！」

『ヒイ！マゾ！？ユーリもう僕やダよあいつ！！』

「んじやとつと片付けるか」

ユーリは刀を握り直し、地面を強く蹴ってザギに向かっていく。セアヴィラはというと、銃口を彼に向けたまま意識をそこへ集中させる。

『ゆらめく焰…？ファイアボール？！…！』

「ぐああ！！」

彼女が放った魔術が命中し、ザギは熱さと痛さで悶えた。その隙にユーリが彼に一撃を食らわせる。

「はぁッ！！」

ザシュ！

「うぐ…ッ」

鮮血が辺りに飛び散った。ザギはよろめき、片膝をつく。どうやら致命傷を与えたらしい。

チャッ

セアヴィラは銃口をザギに突き付け、勝ち誇ったように口角を上げた。

『勝負ありだよ』

「相手、完璧に間違ってるぜ。仕事はもっと丁寧にやんな」

「この人はフレンじゃありません」

「そんな些細なことは、どうでもいい！さあ、続きをやるぞ！」

勝負は見えてると言うのに何故こうも余裕があるのだろうか。ユーリはただただ溜め息を吐いた。

「そりゃ、こういう理屈だよ。ったく、フレンもとんでもねえのに狙われてんな」

『…ねえ、もう良いよね』

人は稀に非情になる。セアヴィラはそういうタイプだった。人がプレイヤーと仕事の時間を割り切るように、セアヴィラもまた時と場合を割り切っていた。

カチャ

ヒュン！

『っ！？』

セアヴィラが引金を引こうとしたその時だった。扉の方からナイフが飛んできて、彼女は咄嗟に飛び退いた。

「ザギ、引き上げだ。こっちのミスで、騎士団に気付かれた」

現れた男がそう告げると、それが気に入らなかったのかザギは男を殴った。そしてまた哄笑した。

「うわははははっ：！オレの邪魔をするな！まだ上り詰めちゃいない！」

『どこに？天国への階段？ああ違った地獄だったね』

「言えてるな」

ハッ、と嘲笑ってセアヴィラが言うと、ユーリも同じようにザギを見る。

「騎士団が来る前に退くぞ。今日で楽しみを終わりにしたいのか？」

そう言った次の瞬間、ザギは男を自分の剣で切り刻んだ。その光景に思わず息を呑む。男を殺したザギは何も言わず、そのまま去っていった。

「ここもゆつくりできねえのな…女神像の話に賭けて、さっさとおいとまするか」

『…そーだねえ…って女神像？』

セアヴィラはユーリに問うが、エステリーゼの言葉で遮られる。

「あの、セアヴィラ、ユーリさん」

彼女に見つめられ、セアヴィラは苦笑してユーリを見る。彼は仕方なさげに溜め息を吐いていた。

「わかったよ。ひとまず城の外までは一緒だ」

『なら僕もVV』

「はい、あの、ユーリさん。わたし、エステリーゼっています」

「んじゃあ、エステリーゼ、急ぐぞ」

そう言い、エステリーゼの頼みでドアを直し、部屋を出た。しかしかなり城内が騒がしい。先程の連中のせいだろうか。：ユーリのせいもありそうなのだが。

途中エステリーゼが転びそうになり、ユーリの提案で彼女は服を着替えることになって、彼女の部屋へ向かう。

「ここがわたしの部屋です。着替えてきますので少し待っていてください」

『ではエステリーゼ様、僕が…』

「いえ、セアヴィラ。あなたは先に自分の怪我を治してください」

彼女はハツとする。思えば傷の事はすっかり忘れていた。痛みもそれほどなかったからだ。

エステリーゼが自室に入ると、セアヴィラは力が抜けたように壁伝いに座り込んだ。どうやら随分と気を張っていたらしい。

「で？おまえは何で傷そのまんまなんだ？…それとあのお嬢さまとの関係は？」

『傷は痛くなかったし？エステリーゼ様とはただの話し相手。それと、護衛に雇われただけ』

いつも通りにへらりと笑い、傷口に手を翳して治療をし始める。するとさっきは治らなかった傷がみるみる治っていく。彼女は内心驚きながらも平静を装う。

「…ふうん」

『やだ、エステリーゼさまの事を内緒にしてたの怒ってんの?』

「別に」

『僕にも色々と契約があるんだよ。本当は僕だってユーリに隠し事したくないんだよ? 恋人だしVV』

「ふざけんな」

バシッ

冗談じゃないのにな、と言いながら彼女はユーリにぶたれた頭を擦った。

『僕はいつだってユーリのことが好きなのにいゝVV』

「はいはいはい」

セアヴィラがハートをばらまいてユーリに抱きつくが、やはりいつものように軽くあしらわれる。しかし彼女は打たれ強いらしく、諦めることはなかった。

「お待たせしました」

やがてエステリーゼが部屋から出てきた。その格好は先程とは打って変わって、白を基準としたドレスのようなワンピースのような服だった。

「あ、あの…おかしいです？」

「…いや、似合ってねえなと思って」

『すみませんけど僕も…』

「そうでしょうか？」

とまあ二人はそう思うが別に文句を言うつもりはない。本人が良いと言うなら良いんだろう。そんな彼女はユーリの前に歩んでき、片手を彼に差し出す。

「何、これ？」

「よろしくって意味です」

『ああああ！エステリーゼ様でもユーリと握手はダメです〜！』

「え、あ、はい？」

代わりに僕が！、と強引にエステリーゼの手を握るセアヴィラ。ユーリはそれに呆れてさっさと歩き出した。

『うわぁん！待ってよユーリィ！』

「！？だから一々抱き着くなっつーの！」

『ヤダヤダ！僕の愛を受け取ってくれるまではくなくさくなくいゝ！！』

「ああはいはいそうですかそうですか」

エステリーゼそんな二人のやり取りをきよんとんとして見ていた。見たことがないセアヴィラの姿に、彼女に自然と笑みが溢れた。

暗殺者と癒えない傷

（たまたま治らなかっただけ、かな？）

01 暗殺者と癒えない傷（後書き）

ユーリにぞっこんラブ（笑）

自分が犠牲になろうとも彼女は気にしません（＾p＾）

02 晴れ渡る旅立ちの日

僕はやっぱり

この街が大好きだ

ユーリの次くらいにね

エステリーゼが着替え終わった後、城の外へ出ようと女神像へと向かう三人。相変わらずセアヴィラはユーリにベツタリだ。そんな中、そう言えば、とエステリーゼが彼に問い掛ける。

「ユーリさんはどうしてセアヴィラのことを？セアラ？って呼ぶんです？」

「ああ？どうしてって？セアヴィラ？なんて長ったらしい名前呼んでらんねーだろ」

「そういうものなんです？」

『僕は気に入ってるから好きですよ、セアラって呼ばれるのVV』

「セアラ、ですか…」

エステリーゼは悩むようにセアヴィラのあだ名を呟いた。しかしユーリもセアヴィラもそれには気付かず、先を進んでいく。

——やがて女神像のある広間に出た。

「お前、セアラとフレンとは知り合って長いのか？」

ユーリがエステリーゼにそう問い掛ける。彼女は考えるように視線を俯けた。

「ええっと…フレンとは二年か、三年…セアヴィラは確か四年…多分それくらい前だったかと…」

「ふーん…セアラは兎も角、あいつ、城の中で上手くやってんの？」

『僕はスルーなのー？』

「お前見れば問題ないことないのは分かる」

『やーんちゃんと見てくれてるなんて僕嬉しいよ、ユーリVV』

「はいはいはい」

すり寄ってくるセアヴィラをいつものように軽くあしらって、ユーリは改めてエステリーゼに聞く。

「フレンはとても真面目で誠実ですから、周りの人からも信頼されているみたいですよ。大きな任務を任されることも、増えてきたと、先日話してくれました」

「真面目で、誠実ね。頭が固くて、融通が利かない、とも言うけどな」

『うーん…言えてるかも…』

「セアヴィラ？ユーリさん？」

不思議そうにこちらを見るエステリーゼを見ぬ振りをして、ユーリは女神像へと歩を進めた。それをセアヴィラは追いかける。

『ユーリ？』

「ふーん…これか……」

「この像に何かあるんです？」

「秘密があるんだと」

ユーリの言葉に疑問を持ちながらエステリーゼは女神像の周りを歩く。セアヴィラはぺしぺしとそれを叩きながらユーリに目を向ける。

『動かしたら秘密の抜け穴があったりして♪』

「まさか…」

「ま、やってみる価値はあんじゃねえの」

そう言いながらユーリが女神像を動かすと、そこには人ひとり通れ

るくらいの穴があり、下に降りられる階段があった。

「……え？ 本当に…？」

「うわ、本当にありやがった…」

『なんてベタな展開』

セアヴィラは乗り出すように穴を覗き込むと、その後ろからエステリーゼが同じように穴を見た。

「もしかして、ここから外に？」

「保証はない。オレは行くけど、どうする？」

そう言ってユーリはエステリーゼを振り返る。セアヴィラも自然と彼女に視線をやった。彼女は少し悩んだ後、覚悟を決めたように顔を上げる。

「……行きます」

『ユーリとエステリーゼ様が行くなら、勿論僕も』

「なかなか勇気のある決断だな。ま、セアラは兎も角」

『何で〜!?!?』

ぷくつと膨れてユーリを振り向くと、何やら呟いていたのが見えた。しかし気にする間もなく、ユーリが穴へ近付く。するとエステリーゼが制止の言葉を掛けた。

「どうした? やっぱり、やめんの? 」

「いえ、手、ケガしてます。ちょっと見せて下さい」

エステリーゼがユーリの手を取り、治療術をかける。しかし彼は驚いたようにエステリーゼの手首についている魔導器を見て、彼女の腕を掴んだ。

「きゃあっ! 」

『ユ、ユーリ!?!?』

いきなりのことに驚いたエステリーゼは慌てて彼の手を振り払う。

「あ、悪い…。綺麗な魔導器だと思ったら、つい、手が」

「本当に、それだけです？」

「ほんとにそれだけ。…。手、ありがとな」

「…い、いえ、これくらい」

それを見ていたセアヴィラは二人の間に割り込んでユーリの腕を取った。そしてそのままエステリーゼを振り返る。

『例えエステリーゼ様だとしてもユーリは譲れません!!』

「あほか」

『痛ッ!?!』

相変わらずのセアヴィラにデコピンを食らわすユーリ。セアヴィラはおでこを押さえながら、柔らかに微笑んだ。

「っ……行くぞ」

『はーいVV』

「はい！」

ユーリ、セアヴィラ、エステリーゼの順に階段を降りていく。中は薄暗く、じめじめとしている。正直こんなところ早く抜けたかったが、どうもそうはいかないらしい。

「…っと、ちゃっちゃと片付けますか」

「セアヴィラ、ユーリさん、前からも…！」

「ちっ…厄介だな」

前からも来る魔物を見てから、セアヴィラは腰のフォルダーから二丁拳銃を取り出す。同時にユーリも鞘から刀を抜き放った。

『僕がバックアップするから思いっきり暴れていいよ、ユーリ!』

「じゃあ後は任せたぜ!」

「わ、わたしもお手伝いします!」

『無理をなさらないで下さいね!!』

それから三人はあつと言う間に魔物を倒した。ユーリとセアヴィラは慣れてる為か汗ひとつ掻いておらず、平然としていた。

「…ま、こんなもんか」

『案外楽だったね』

二人は各々武器を仕舞うとへたりこんでいるエステリーゼを見る。セアヴィラは軽く微笑むと彼女の腕を掴んで立たせた。

『大丈夫ですか?』

「何とか…いっぺんに襲われた時はどうなるかと思いました…」

ぐいっと汗を拭いながらエステリーゼは言う。

「敵は各個撃破が戦闘の基本だけど、たまにやこういうのもある」

「そうなんです？じゃ、気を付けて進んだ方がいいですね」

「少ない敵を相手にして確実に倒すか、いっぺんに多くの敵を薙ぎ倒すか、それは好みによるけどな」

エステリーゼはその言葉に首を傾げ、セアヴィラとユーリを交互に見やる。

「セアヴィラとユーリさんはどっちなんですか？」

「どっちでもいいだろ」

『聞かない方がいいですよ』

あはは、と笑って誤魔化する。聞かない方がいいことは世の中に沢山ある。エステリーゼがした質問はこの類いに入るだろう。

「ほら、急ぐぜ」

『はいはいVV』

「あ、ちょっと…待って下さい」

ユーリの先導に従って着いていくセアヴィラとエステリーゼ。勘に頼って道を進んでるのだが、どこも同じような道ばかりだ。

「地下の通路を教えてくれた人に感謝しなきゃいけませんね」

そんな中、エステリーゼがユーリに話し掛けと、彼は面倒くさそうに対応する。

「別におまえが感謝する必要はないんじゃないか」

「わたしだって、外へ行きたかったんだから、あなたとおんなじで

す」

「それならそれでいいんだけど…なんでか、素直に感謝する気になれないんだよな」

地下通路を教えてもらったことに不服があるのか、そんなことを呟くユーリ。

「ダメです、恩ある人にはちゃんとお礼しないと」

セアヴィラは苦笑いをしながらその会話を聞いていた。エステリーゼはいつも人に優しく人を敬っている。そこがいいところだともセアヴィラは思う。

『エステリーゼ様らしいですね』

「会ったこともない相手によくそう律儀になれるもんだな」

「会ったことのない人だからこそ、礼を失してはいけません」

「ふーん、そういうもんかね」

「そういうものです」

そこで会話が途切れ、三人はただただ道を進んで行く。何度か魔物と戦いながらも出口と思わしき上に登れる階段を見付けた。

『あれかなあ。登ってみるよ』

「いや、オレが行く。セアラはこいつと後ろからついてこい」

『!…うん、ユーリ!! (やっぱりユーリって優しいよね。素直じゃないけどVV)』

嬉しそうにユーリに抱きつくセアヴィラ。ユーリは軽く彼女を促してから階段を登り始める。セアヴィラとエステリーゼはその後が続いてゆっくりと登っていく。

「うわ、まぶしっ…」

『うっそ!?! ってことは一晩地下通路で迷ってた訳!?!』

「あゝあ。一晩無駄にしたな」

外に出たユーリは眩しそうに目を細めて辺りを見回す。続いてセアヴィラとエステリーゼも地上へと出た。

『あれ？ここ貴族街？』

「こんなところに繋がってんのか」

『っにしても、もう朝か』

セアヴィラが欠伸をしながら背伸びしていると、突然後ろから歓声が聞こえた。振り向くと辺りを見て目を輝かせているエステリーゼがいた。

「すごいですセアヴィラ！！窓から見ると、全然違って見えます」

「そりゃ大げさだな。城の外に来るのが、初めてみたいに聞こえるぞ」

「…そ、それは…」

『僕が知る限りではエステリーゼ様は殆ど外に出てないらしいよ』

慌ててセアヴィラはフォローすると、ユーリは然程気にすることなく視線を反らした。

「ま、お城に住むお嬢様ともなれば好き勝手に出歩けないか」

「は、はい、そうなんです」

「ま、とりあえず脱出成功ってことで」

ユーリはそう言って片手を上げる。エステリーゼはその意味が分からず、首を傾げてユーリの上げた手のひらに人差し指をくっ付ける。

「あはは…」

「あ、あの、何か間違えました？」

「うーん、そうだな。んじゃセアラ。ほら」

『待ってたよユーリっVV』

うずうずしてる彼女を見てか、ユーリはセアヴィラに声を掛けて再び片手を上げる。そして、パァン、と良い音が響いた。

「こんな感じ？」

「な、成る程！」

『ハイタッチって言うんですよ』

満足そうに笑顔になりながらセアヴィラが言うと、ユーリが視線を二人に向ける。

「：で、エステリーゼは、これからどうすんの？」

『うーん…城を出てきたのはいいですけど…エステリーゼ様はもしかして…』

「はい。フレンを追います」

やっぱり、とセアヴィラは溜め息を吐く。

「行き先知ってんのか？」

「先日、騎士の巡礼に出ると、話していましたから…」

エステリーゼの言葉に思い出したようにユーリは苦笑いする。巡礼とは帝国の街を回って善行を積んでくるというものだ。

「だから花の街ハルルを目指します。騎士の巡礼では最初にハルルへ行くのが慣わしですから」

「となると、結界の外か」

「ユーリさんは結界の外を旅したことがあります？」

「少しの間だけならな。外ならセアラの方が詳しいし…興味はあるけど、下町を留守にするわけにはいかないしね。オレも下町に戻るから、街の出口まで案内するよ」

「ありがとうございます」

ユーリの言葉にセアヴィラは、えー、と不貞腐れる。彼は眉を潜めて彼女を振り返った。

「なんだよ…」

『ついてきてくれないのー！？』

「お前は強いんだからひとりでも大丈夫だが」

『女の子二人で行かせる気なんだ！？ユーリの薄情者ー！』

「はいはいはい。もういいからほら、戻るぞ」

膨れたセアヴィラにヒラヒラと手を振りながらユーリは歩き出す。
セアヴィラは暫くその背を見詰め、大きな溜め息を吐いた。

『エステリーゼ様、申し訳ありませんが下町の出口で待っていてくれませんか？僕まで勝手にいなくなる訳には参りませんので、上手い具合に都合をつけてきます』

「都合、ですか？」

『はい。どうなるかは分かりませんが…取り敢えず行ってきます』

「はい。お気を付けて」

セアヴィラはそう言い残して城の中へ入っていく。案の定、ユーリが脱獄したという騒ぎ、さらにエステリーゼがいなくなったという騒ぎが城中に広がっていた。

「！セレーネ様！！どこに行っておられたのですか！！」

『勿論エステリーゼ様探し。で、エステリーゼ様は？』

「そ、それが、何人かがユーリ・ローウェルと共にいたところを見た
と…」

『ユーリ、とね…』

兵士から話を聞いていると、他の兵士からユーリとエステリーゼを目撃したという報告があった。それを一番に聞いたルブラン隊が下町へと向かったらしい。

「セレーネ様もユーリ・ローウェルを捕縛せよとのご命令がかかっております！」

『…はあ。エステリーゼ様やヨハン様に命令されるなら兎も角、他人に命令される覚えはないんだよな…まあ、行くか』

そんなことを言ってるが、内心はかなり焦っていた。あそこで二人にしたのはまずかったかも知れない。セアヴィラは平然を装いながら急いで下町へと向かう。

すると途中で倒れているアデコールとボッコスを見付けた。

『何やってんの、デコボコンビ』

「セレーネ様!？」

「あの、そのっ、ユーリ・ローウェルが!」

『ああはいはい分かった分かった。で、ルブランは?』

聞くとユーリを追いかけて下町へ行ったとのこと。セアヴィラは、ご苦労様、と彼らを見捨て下町への坂を駆け降りた。そこはまるで何かのイベントがあったかのように下町の住人たちが溢れかえっていた。

『ちょ、ハックスじっちゃん!?!この騒ぎは…ってそれよりユーリは!?!ユーリは!?!』

「既に外じゃ！ピンク色のお嬢さんも一緒だったぞ」

『っ、ハックスじっちゃん！僕も行ってくる！無茶はしないでね！』

「ん？ああ、おまえさんもな！！」

『あ、それと部屋にある僕の鞆の中のもの、適当に使っちゃっていいからね！！』

セアヴィラはハックスに向かって叫んだ後、建物を伝って出口を目指す。一応鞆の中にはお金や食料、そして水が大量に詰めてある。きつと役に立つと思う。もう少しで出口と言うところで、今度はルブランが倒れていた。

『だから何やってんだよ』

「セレーネ様！？あわわ、申し訳ありません！ユーリ・ローウェルとエステリーゼ様を逃してしまいました！！」

かなり動揺してる彼を見て、今日何度目かの溜め息を吐いた。

『アレクセイに伝えて。僕はユーリとエステリーゼ様を追う。文句

は言わせない、ってね』

「な、何をおっしゃって…」

『…僕は守護役だよ？ エステリーゼ様を守るのが僕の仕事。今の僕じゃユーリと戦っても勝てないから、エステリーゼ様を助けられないだろうしね。だから僕はエステリーゼ様についていくよ』

バサツと髪を払ってセアヴィラは下町の門を潜り、外へ出た。空を見上げれば真っ青な空が広がっていて太陽が眩しく輝いている。

『うん、良き旅立ち日和かな！…なんちゃって』

軽くストレッチをしてからセアヴィラは北の方向を見やった。

『ハルルを目指すってことなら、先ずはデイドン砦だよね』

そう呟いてからセアヴィラは駆け出し、暫く走り続けると、漸くユーリたちに追いついた。そこにはエステリーゼの他にラピードもあり、セアヴィラに気付いたラピードは勢い良く彼女に飛び付いた。

「ワフツ」

『わっ!？ラピードっ、ちょ、待っ!ひゃっ、く、くすぐりたい!』

「……」

ラピードは尻尾で彼女の首元や脇をくすぐる。そんな様子を見てたユーリは、あくまで冷静な態度でラピードをセアヴィラの上から退けた。

『ほえ?ユーリ?』

セアヴィラはキョトンとしてユーリを見た。

「なんでもねえよ」

『? そう?それよりユーリも一緒に行ってくれるんだね!嬉しいよ!VV』

「成り行きだよ成り行き。下町のやつらに色んなもん渡されたから行かないわけにもいかねえしな」

ユーリはもらったものが入ってあろう袋をセアヴィラに見せながら言う。彼女はしゃがみこんで、僅かにすり寄ってきたラピードを撫でながら嬉しそうに微笑んだ。

「あの、ユーリ、セアヴィラ、こちらの犬は…」

それまで微笑ましく見ていたエステリーゼが、ラピードを見てふとそんな質問を問い掛ける。

『ラピードのことですか？』

「こいつはオレの相棒だ」

「ワン！」

「あ、こちらこそよろしくお願いします」

え、とユーリとセアヴィラは彼女を見る。

「こちらこそって、ラピードが何言ったか、わかったのか？」

「いえ、全然…」

『あはは…そりゃそうですよね…』

セアヴィラは苦笑いしながら、よつ、と立ち上がり、そろそろ行こうか、と二人に提案する。

「んじゃ行くか、セアラ、エステル」

「はい、ユーリ！」

『？エステル？！？？ユーリ？！？』

思わずセアヴィラは叫んだ。さっきの短時間に一体何があったと言うんだ。訳の分からないセアヴィラはかなり動揺する。

『何それふたりとも!?!?』

「何って…オレなりの呼び名?」

「さん付けではよそよそしいと思ひまして…」

セアヴィラは二人の言葉を聞いて呆然とした後、ラピードを抱いてぐずりだす。彼女にとって例え守るべき人であっても、そういう感情がなくても、女性が好きな人に（距離的にも気持ち的にも）近づくと嫉妬するらしい。隠さないのは彼女らしいとも言えるのだが。

『うわぁん! もういいよー!! 好きにして!! 僕のことほつとい
てー!!!!!!』

「い、一体どうしたんです、セアヴィラ?」

「放っておけ。ほら、行くぞセアラ」

『ユーリの、バカあ…』

「はいはい」

ユーリはセアヴィラの腕を引いて立たせて、頭を数回叩いて慰めた。何が何だか分からないエステリーゼ、基、エステルは首を傾げてい

た。

晴れ渡る旅立ちの日

（やっぱりユーリが好きだ！これだけは譲れない！！）

02 晴れ渡る旅立ちの日（後書き）

うまい具合に理由づけ、たのか、これ？↑

03 平原を駆る魔物の群

いつかこうやって

大好きな人と

世界を見て回りたいて

思ってたんだ

さわさわと心地よい風がセアヴィラの長い緑の髪を撫でる。その隣には服も髪も真っ黒な青年ユーリと、ピンクを基準としたドレスのような服を着たピンクの髪の少女エステリーゼ。そしてどこか凛々しい犬、ラピード。

「しかし、こんな形で旅に出ることになるなんて思わなかったぜ」

『いいじゃん！僕はユーリがいるだけで幸せだよおVV』

「お前はな」

ふとユーリが溢した言葉にセアヴィラが反応するが、やはり軽く流される。

「ユーリは帝都から離れたくなかったんです？」

「ん？まあ、下町なんかに住んできると、今日を生きるのに精一杯だね。あんまり真剣に考えたことなかったんだよ。漠然と旅に出てみたいとは思ってたけどな」

確かに、貴族街と比べれば下町は結構悲惨な状況だ。何度下町の住人たちが現状を訴えようとも騎士団は取り繕ってはくれなかった。そんな騎士団を何度止めたいと思ったことか。だけどユーリやフレン、そしてエステリーゼがいてくれたから、彼女は今も騎士団に所属しているのだ。

「わたしは、ずっと外の世界に憧れていました。ただ、外にいただけで、感激してます」

セアヴィラが知る限り、彼女は一度も城の外に出ていないと聞く。
故にセアヴィラと共に外を歩くのも初めてだ。彼女もまた、それを
新鮮だと思っている。

「ま、感激するのもいいけどほどほどにな。フレンがピンチなんだ
ろ」

「だから、フレンを心配しながら感激してるんです」

「フッ、わかったよ」

小さく笑うユーリに、セアヴィラもつられて笑った。

ふ、とセアヴィラは帝都を振り返る。いつの間にか帝都が見えくな
る程の距離を歩いていた。そんな彼女の隣にユーリが並ぶ。

「ずいぶんと帝都から離れたな」

『そうだね、もう殆ど見えないもんねえ』

「ええ…ここまで逃げてくれば、大丈夫でしょうか」

さらにエステリーゼが隣に並びながら言う。ユーリは、さあな、と
答え溜め息を吐いた。

「無駄に連中しつこいからな」

「ワン！」

「ん…？」

『ラピード？どしたの？』

三人が話してる中、突然ラピードが後ろを向いて吠えた。彼女たちは
どうしたのかとそちらを振り返る。

「…む…」

「どうもお」

そこには馬車があり、その傍らにはその持ち主であろう人が二人立

っていた。

「こんにちは」

「いらっしやいませえ♪」

エステリーゼが挨拶をするとそう返ってき、ここはお店なのかと尋ねる。聞けば旅をしながら宿を提供してるらしい。一行はお言葉に甘えて一晩をそこで過ごすことにした。

『やくんユーリと一緒に寝るなんていつ以来かなあ♪』

「ああそうだな」

『ユーリ棒読みすぎだよ』

しかしセアヴィラは落ち込むことなく、するり、とユーリの腕に絡み付く。

「確かフレンもお二人とは幼馴染みでしたね」

「まあこいつとは兎も角、フレンとはただの腐れ縁だよ」

『でも仲良いもんね!』

「だからそれが腐れ縁なんだよ」

『あれ、そうだっけ?』

あはは、と笑いながらセアヴィラはゴロンと布団に寝転んで目を瞑る。そんな彼女を見て、ユーリとエステリーゼも身体を倒し、眠りについた。

翌日、この宿のおかげで追っ手を気にすることもなかった一行はぐっすりと眠れた。カレンとリッチと名乗った二人にお礼を言い、再び歩を進めるセアヴィラたち。

「ユーリは魔術を使わないのです?」

そう言えば、と毎回ユーリの戦いを見ていたエステリーゼがそう問
い掛ける。

「使わないんじゃないじゃなくて使えねえの。オレ、そっちの才能はないらしくてね」

「でも、プラステイア魔導器さえあれば、魔術の理論を学ぶことで誰でも使えるようになるはずですよ？ そうですね、セアヴィラ」

隣のセアヴィラに振ると、彼女は苦笑いを試ながらユーリに視線を向ける。

『まあ基本はそうです。でもユーリの場合は…』

「その魔術の理論を学ぶ才能ってのが、オレにはなかったって話だよ」

「それってつまり、ユーリは勉強が嫌いなんですね」

「そうとも言うな」

今の発言を聞く限りそうとしか言えないだろう。勿論セアヴィラは知っていたので何も言わなかったのだが。

「セアヴィラ：セアヴィラはいつもこんな広い世界を旅していたのですね」

『エステリーゼ様？』

「いきなり、何を言い出すんだか」

「帝都も凄く広いと思いましたけど、外はもっと広いじゃないですか。あの空なんて、どこまで続いているんでしょう……わたし、こうやってセアヴィラの隣を歩くことを夢見てました」

突然彼女は青く広がる空を見つめながらそう言った。外に出ることを禁じられていたエステリーゼはいつもセアヴィラが持つてくる土産話を聞いていた。任務先であったこと、話したこと、魔物を退治したこと。エステリーゼにとって外は未知なる世界だったのだ。

「ま、その気持ちも、わからんではないか。下町に比べりゃ、バカみたいに広いもんな」

『これからきつと、色んなものが見えるようになりますよ』

セアヴィラが楽しそうに言うと、エステリーゼは笑顔で頷いた。

やがて一行はティドン砦に到着する。見回せばあちらこちらに騎士団員がいるのが分かった。エステリーゼは彼らを警戒するようにユーリを見やる。

「ユーリを追ってきた騎士でしょうか？」

その言葉にユーリはセアヴィラを振り向く。しかし彼女は、分からない、と首を振った。

「だよ。ま、あんま目立たないようにな」

「はい。わたしも早くフレンに追いつきたいですから」

「んじゃ、さっさと砦を抜けますか」

そう言って門の方へ歩き出すユーリだったが、エステリーゼは何かに引かれるように二人から離れる。セアヴィラは苦笑いをして彼女を見ていた。

「ほんとに分かってんのかね」

『まあまあ。エステリーゼ様は何もかもが初めてなんだから仕方ないよ』

宥めるように言うと、ユーリは仕方なしにエステリーゼがいる方へ向かった。セアヴィラもその後についていく。

「はい、いらっしやい。今日はいいい品入ってるよ。かの剣匠アッサムが打った武能スキルの宿った名剣だ。旅をするなら武能は重要だよ。是非お試しあれ」

「武能って？」

声をかけられた商人の聞きなれない単語に、ユーリは問い返す。

「?武能とは武器に宿った戦闘技術の事。戦闘技術は本来、誰かに師事し、教わるものだが、剣匠アッサムは特殊な方法を用い、その技術を武器に封じ込めた?」

エステリーゼはまるで何かに取りつかれたように武能の説明をし出す。

「?武醒魔導器には、力を封じ込めた武器より技術を習得する機能がある。武器を使い続けることでその武器に宿った武能を装備者に還元することができる?んです」

長々とした説明にセアヴィラは口元を引きつらせた。暫く会ってなかったが、彼女の頭の中は変わってないらしい。

『あはは…相変わらず凄いですねえ…』

「昔にクリティア族が人間に伝えた和本にありました」

「へえ、武醒魔導器って技や魔術を使う為だけかと思ってたぜ」

ユーリは自分の右腕につけてある魔術をに目を向けた。

「自分に合った戦いをするために、武能を考えながら武器を選ぶ
てのが賢いってものさ。武能の無い、単純に攻撃力の高い武器もあ
る。闘い方は好みだけどね」

『あー、説明はいいよ。この本に載ってるし、それに僕も知ってる
からさ』

セアヴィラはめんどくさそうに商人をあしらう。エステリーゼ程で
はないが、セアヴィラも結構博識なのだ。

「ってわけだ。それよりおっさん、こんな場所で商売やってて繁盛
してんの？」

「いやあ、俺も好きで、ここにいるわけじゃないんだ。砦の向こう
に魔物が出ちまって足止め食ってるのよ」

「魔物がね……だ、そうだぞ？」

そうエステリーゼに振るが、彼女は本に夢中で聞いちゃいなかった。
まあまあ、とセアヴィラはユーリの肩を叩く。

「…え？なにか言いました？」

「セアヴィラと情報集めてくるから、そこで待ってけって言ったの」

『ちょ、待ってよ』

さっさと歩き出すユーリに慌てて着いていくセアヴィラ。その後に
エステリーゼも追いかけてきた。腕に先程の本を抱えて。

「その本、面白いの？」

「面白いですよ。あとでセアヴィラとユーリにも貸してあげますね」

「気が向いたらな」

『ですね』

行くぞ、と二人に声を掛け、三人は情報収集の為に砦内を散策し始める。その途中、突然辺りに警鐘が鳴り響いた。門の向こうからは人が逃げるように砦の中へと入ってくる。しかしまだすべての人が入りきっていないと言うのに、扉を閉めろとの言葉がかかった。

「あれ、全部、魔物なの…」

「帝都を出て早々にとんでもないもんにあつたな。オレ、なんか憑いてんのか？」

『ユーリ』

「ああ」

セアヴィラが流し目でユーリを見やると、二人は門へと走り出した。その後ろをラピードがついて来て、扉を閉めようとする騎士団を阻止する。その隙にユーリとセアヴィラは門を潜った。

『エステリーゼ様、絶対にここから動かないでくださいね』

「でも…」

『返事は!?!』

「は、はい!」

セアヴィラが振り返って言うと、エステリーゼは仕方なしに了承する。それを確認すると、セアヴィラは真っ先に足を怪我してるであろう男性の方へ向かった。

「た、助けて…立てなくて…ひっ…！魔物が、魔物が…！」

『直ぐ治療します。…？ファーストエイド？！』

そう言葉を紡ぐと、淡い緑の光が男性を包み、みるみる足の傷が治っていく。ふとユーリの方を見れば、彼も女の子を無事に助けたみたいだった。セアヴィラも男性と共に門の中へと避難する。しかしユーリが助けた少女が人形を落としたのだと言う。

『僕が行く』

「あっおい、セアラ！！」

ユーリが駆け出すセアヴィラに手を伸ばすが、その手は空を切った。セアヴィラは急いで人形のある場所と向かい、それを拾い上げると目の前まで迫っている魔物の群れを見て顔をひきつらせる。

『やっぱ…』

「セアラ!!」

『うわわわっ!!』

慌てて踵を返して門へと走り、そしてギリギリのところまで岩内へ滑り込んだ。背後で魔物が扉にぶつかる音を聞きながら、セアヴィラは起き上がって安堵の息を吐いた。

「お人形く!お姉ちゃん、ありがとう!」

『いえいえ!もう落としちゃダメだよ?』

「うん!」

はい、と人形を少女に渡すと満面の笑みでお礼を言われた。その笑顔にセアヴィラも笑顔で返した。

「…みんなが無事で本当によかった……あ、あれ…」

エステリーゼは安心したのか、力が抜けたようにへたり込んだ。彼女を見てセアヴィラは微笑んだ。

『ちゃんと約束守って下さってありがとうございます』

「あ、いえ：きつとわたしもセアヴィラと同じように飛び出してると思いますから」

「ほんとお前は無茶しすぎなんだよ。そう言うところは何も変わっちゃねえよな」

『だって僕は僕だし』♪

セアヴィラはくるっと回ってユーリに向かってニツコリと笑う。そんな彼女に溜め息しか出なかった。

「結界の外って、凶暴な魔物がたくさんいて、こんなに危険だったんですね」

「あんな大群で来られたら結界がほしくなるな」

『ま、あんなに大群も珍しいけどね』

セアヴィラはユーリとエステリーゼの隣に座り込んで話す。

「ここに結界魔導器シルトプラスティアを設置できないんでしょうか？」

「そりゃ、無理だろ。結界は貴重品だ」

『それに今の技術では作り出せないですしね』

「そう、ですよね：魔導器を生み出した古代ゲライオス文明の技術がよみがえればいいのに：」

エステリーゼは言いながら空を見上げる。確かにそれがあれば今では貴重な結界魔導器を作れるかもしれない。しかしセアヴィラは首を振る。

『今の騎士団の現状を考えるとそれは難しいと思いますよ』

「だな。帝国が民衆のためなのはちょっと想像しにくいな」

そうユーリが言った次の瞬間、彼は立ち上がり、セアヴィラはハツとして背を向ける。何事かと、エステリーゼが視線を前に向けると、そこには騎士団の姿があった。

「その三人、少し話を聞かせてもらいたい」

セアヴィラは、やばいなあ、と呟くと腰の銃に手を掛ける。

「だから、なぜに通さんのだ！魔物など俺様がこの拳で、ノックアウトしてやるものを！」

突然、話を遮るように怒鳴る声が聞こえてきて騎士団員はそちらを振り返る。

「簡単に倒せる魔物じゃない！何度言えばわかるんだ！」

「貴様是我々の実力を侮るというのだな？」

セアヴィラたちも気になったのかそちらに目を向ける。そこには細身の男と難いといい男がおり、目の前の騎士団員に刃を向けていた。

「邪魔するな！先の仕事で騎士に出し抜かれたうっぶんをここで晴らす！」

どうやら今はこっちより向こうの連中の方に注目がいつてるようだが、しかもこの様子だと門を抜けてハルルへ向かうのは難しいだろう。

「フレンが向かった花の街ハルルはこの先なのに」

「騎士に捕まるのも面倒だ。別の道を探そう」

『それにしても凄く注目されちゃったね…そこまで計算してなかったや…』

セアヴィラは守護役と言う極秘の任に着いている為、一般の団員にはあまり顔は知れてない。しかしセレーネと名乗れば一発で分かっ
てしまう程、帝都では有名なのだ。

「セアラには目立つなっつっても無駄だからなあ…」

『あれえ？僕よりやる気満々だった人はどこの誰だったかなあ？』

「っ目の前で、魔物に襲われそうになってるやつを放っとけねえだろ」

『それは僕だって同じだよ？それ、に、僕は出来ないって決めてつけてやらないのは大嫌いなんだよね』

知ってるでしょ？、と満面の笑みで言うと、ユーリは溜め息を吐いて苦笑いをした。そんな二人を見てエステリーゼは笑う。

「あ、ごめんなさい。二人ともフレンが話してたとおりの人なんだと思って」

『うえ？フレンが僕とユーリのことを？』

「はい。目の前に困ってる人がいると放っておけないんだ、似た者同士だって、よく言っていました」

「あいつもそうじゃねえか。今度会ったら、お互い様だってユーリとセアラが言ってたって伝えといてくれ」

確かに彼女たちは似た者同士だ。三人は何をするのも同じだった。しかし実際そうなのだから、言われて悪い気はしない。

「ねえ、あなたたち。私の下で働かない？ 報酬は弾むわよ」

突然後ろから赤髪の女性に話し掛けられたが、ユーリは知らんぷりする。セアヴィラもそれにつられて見ぬ振りをした。すると部下であろう男性が彼女たちに、失礼だぞ、と文句を言う。

「名乗りもせずに金で釣るのは失礼って言わないんだな。いや、勉強になったわ」

『まるで騾がなってないよねえ』

「おまえら！」

セアヴィラとユーリの言い様に部下の男は突っかかろうとする。それを女性が手で制した。

「予想通り面白い子たちね。私はギルド？幸福の市場？のカウフマンよ。商売から流通までを仕切らせてもらってるわ」

「ふうん、ギルドね…」

ユーリが呟いた瞬間、地面が揺れた。収まるのを待ってから、カウフマンが話し始める。

「私、今、困ってるのよ。この地響きの元凶のせいで」

「あんま想像したくねえけど、これって魔物の仕業なのか？」

「ええ、平原の主のね」

『ああ、あのでっかいやつね』

知ってるのか、とユーリはセアヴィラを振り向く。セアヴィラは何度かあの大群を目の当たりにしたことがあるのだ。

「あの、どこか別の道から、平原を越えられませんか？先を急いでるんです」

「さあ？平原の主が去るのを待つしかないんじゃない？」

す、とセアヴィラは目を細めて、カウフマンの態度に違和感を持つ。それはユーリも同じだった。きっと彼女は抜け道を知ってるのだらう。

「焦っても仕方ねえってわけだ」

「待ってなんていられません。わたし、他の人にも聞いてきます！」

いてもたってもいられなかったのか、エステリーゼは駆け出し、それをラピードが追う。セアヴィラはユーリと顔を見合わせて溜め息を吐いた。

「流通まで取り仕切ってるのに別の道、ほんとに知らないの？」

「主さえ去れば、あなたたちを雇って強行突破って作戦があるけど、協力する気は…なさそうね」

「護衛がほしいなら、騎士に頼んでくれ」

「冗談はやめてよね。私は帝国の市民権を捨てたギルドの人間よ？」

自分で生きるって決めて帝国から飛び出したのに今さら助けてくれないでしょ。当然、騎士団だって、ギルドの護衛なんてしないわ」

カウフマンの話にも一理ある。何年も騎士団にいるセアヴィラだったが、ギルドの頼みを聞いたと言う一例はない。

「へえ、自分で決めたことはちゃんと筋を通すんだな」

「そのくらいの根性がなきゃギルドなんてやってらんないわ」

「なら、その根性で平原の主もなんとかしてくれ。行くぞ、セアラ」

『あ、うん』

呼ばれたセアヴィラは慌ててユーリを追いかける。しかし、途中でピタリ、と足を止め、カウフマンを振り返った。彼女は首を傾げてセアヴィラを見る。

『クオイの森』

「！」

『今思い出した。あなたたちはそこを通らない。勿論、僕も通ったことはない。あそこは、呪いの森だから』

「…ふふ、察しのいい子は好きよ。それより良く知ってるわね、あなた」

カウフマンに向かって、セアヴィラはにっこりと笑顔を見せる。そしてそれ以上はなにも言わず、セアヴィラは向こうで待っているユーリの元へ駆け出した。

「セアラ？」

『西のクオイの森。そこからだったら平原に抜けられるよ』

「！ 行ったことあるのか？」

『ううん。けどそこかしこ行く道は無いと思う』

そうか、とユーリは少し悩む素振りを見せてから小さく頷いた。二人は視界に映るエステリーゼを振り向く。

「エステル」

彼女は疲れたのか、地面にへたり込んでおり、その傍らにはラピードがいた。ユーリが声を掛けると、エステリーゼは一度こちらを向いて、そっぽを向く。

「：ちよつと、休憩です。魔物が去るまでこんな場所で待ったりしませんから」

「あつそ。じゃあ、セアラとふたりつきりで抜け道に行くことにするわ」

『（そっそれはそれで美味しいよユーリ！！）』

「え？わかったんですか？待ってください！」

ふたりつきりを強調されて無駄にテンションが上がるセアヴィラ。しかしそれを内心に納めてユーリを追った。

「そう言えばさっきのお姉さん、ギルドの人間だって言ってたな」

「幸福の市場のカウフマンさん、ですね」

『ちょっとユーリ、浮気は許さないよ』

「ちげえよ」

真顔で言うセアヴィラにデコピンを食らわしす。そんな些細なことでも反応されたことが嬉しいのか、彼女は笑顔になった。

「帝国の市民権捨てて、自分たちで自由に生きてる連中か…」

ふとそんなことを呟いたユーリにセアヴィラは首を傾げて、ギルドに興味があるのかと問う。

「いや、興味ってか、ちと珍しくてな」

確かに、とセアヴィラは頷く。

『あのタイプのギルドは珍しいかも』

「ああ。帝都には、騎士の護衛は受けないなんて、肝の据わったギルドの人間いなかったからさ」

「この先も、ギルドの方々に会う機会があるかもしれませんね」

「あのお姉さんみたいに、押しの強いのは、ちと勘弁だけだな…ま、セアラと変わんねえか」

『やだなあ、僕はお金なんかで釣らないよ？僕はちゃんと実力でユーリを手に入れるから！』

「それも違えだろ」

満足気にガッツポーズをするセアヴィラに冷静に突っ込むユーリだった。

平原を駆る魔物の群

（ああ、あれはめっさ怖かった…何度見てもあの大群は慣れないや…）

04 静寂なる呪いの森で

呪いの森…

クオイの森はそう呼ばれている

あそこには何かがある

…だからこそ僕も通らなかった

平原へ抜けられるらしいクオイの森。セアヴィラたちはそこにいた。辺りは薄暗く、空気がひんやりとしている。時折聞こえる動物の鳴き声が嫌に耳に響く。

「クオイに踏み入る者、その身に呪い、ふりかかる、と本で読んだことが…」

『通称、呪いの森、ってね』

「成る程、だからセアラは来たことなかったんだな」

『ま、そーゆーこと。呪いなんて信じちゃいないけど……』

セアヴィラはそこまで言うのを閉ざし、何でもない、とヒラヒラと手を振った。そんな彼女に疑問を持ちながらも、ユーリは森に足を踏み入れる。セアヴィラとラピードはその後に続くが、惑ってるのかエステリーゼはなかなかその場を動かなかった。

「行かないのか？ま、オレはいいけど、フレンはどうすんの？」

フレンの名を出されたエステリーゼは覚悟を決めたように、行きましょう、と足を進めた。こんなに肝の据わったお姫様は珍しいと思う。彼女のそんなところに、セアヴィラは惹かれたのだろう。

「この森、本当に砦の向こうに抜けられるんですか？」

「抜けられなければ戻りゃいいって」

「…もし呪いでカエルやヘビになったりしたら、どうしましょう」

『エステリーゼ様、それは何のお伽噺ですか』

いや、彼女は本気でそう思ってるのだからかもしれない。悪いと思いつつ、セアヴィラは笑いを堪えていた。純粹すぎるのもどうかと思う。それはそれで興味深いのだけれど。

「ま、そうしたら、オレが責任もって面倒見てやるよ」

「面倒見る…って…？」

ユーリの言葉に、ピタリ、とセアヴィラは停止する。

「心配するな、子供の頃、カエルもヘビも飼ってたことがある。世話の仕方はばっちりだぜ」

「わたし、ユーリがカエルやヘビになったら、お世話する自信ありません…よ？」

『ユーリに面倒見てもらえるならいいかも…』

「は？」

ボソツと聞こえたセアヴィラの言葉にユーリが振り返る。彼女は目を輝かせてユーリを見ていた。

『カエルになったらユーリにペタペタくっつきまくれるし！へびになったらユーリに絡み付けられるし！ヤバイ！！めっさ至徳じゃん！！』

「安心しろその時は腹をかつ捌いてやるから」

『Σ痛い！！痛いよユーリ！！』

セアヴィラは自分のお腹を押さえて怯える。しかしエステリーゼにはそれが楽しそうにも見えた。そんな彼女は途端に足を止めた。

「何の…音です？」

その言葉にエステリーゼの前にいた二人は気を張り詰める。警戒しながら辺りを見回すが、何の姿も気配も無かった。

「足元がひんやりします…。まさか！これが呪い！？」

「どんな呪いだよ」

「木の下に埋められた死体から、呪いの声がじわじわと這い上がりわたしたちを道連れに…」

「おいおい…」

『流石にそれはないですねえ』

ユーリは過度の妄想に呆れたような態度を取り、セアヴィラは苦笑いをしてながら数歩足を進める。すると彼女の瞳に倒れた塔のようなものが映る。

『ね、ユーリ。あれ、魔導器ブラスティアだよね？』

「ん？…ああ、確かに魔導器だな。なんでこんな場所に…」

やがて、暫く魔導器を見ていたユーリは振り返り、休憩しようと提案する。

「だ、大丈夫です」

『エステリーゼ様、無理はなさらない約束ですよ』

「セアヴィラ…でも…」

『ほら、僕もちょっと疲れましたし、丁度いいじゃな——』

言いながらセアヴィラが魔導器の窪みの辺りに近付いたその時だった。

『わっ』

「うわっ」

「きゃあっ」

目映い光が辺りを包んだ。瞬間、ふ、とセアヴィラの意識が途切れ、彼女は地面に倒れ込んだ。それを見たユーリは咄嗟に駆け寄り、セアヴィラの身体を起こす。

「おい、セアラ!!」

「セアヴィラ!!」

「っセアラ…!」

珍しく、いつも余裕たっぷりのユーリが顔を歪めた。彼はぐったりと倒れ込んでいるセアヴィラの髪をそっと梳いた。

――

――

――

(何だろう…何か、気分悪い…?)

セアヴィラはパツチリと目を覚ます。一番に目に入っただのはユーリの顔。彼女はキョトンとして彼を見詰めていた。

『ユー、リ…?』

「！ 起きたか…大丈夫か？」

『ちょっと、気持ち悪い…ん？あれちょっと待って…何でユーリが僕を見下ろして…おお！？まさか膝枕！？』

「相変わらず元気だな」

ユーリは溜め息を吐いて立ち上がった。セアヴィラは彼の膝の上に頭を乗っけていたため、転がるように膝から落ち、地面に頭をぶつけた。

『あたた…酷いなあ。それより僕、何で寝てたんだっけ…』

「突然倒れたんだよ。何か身に覚えはないか？」

『あー…もしかしたらエアルに酔ったのかも…』

ぶつけた後頭部を擦りながらセアヴィラは言う。

「エアルって魔導器動かす燃料みたいなもんだろ？目には見えないけど、大気中に紛れてるってやつ」

『うん、そのエアル。濃いエアルは人体に悪い影響を与えるんだってさ』

「ふーん、だとすると呪いの噂ってのはその所為なのかな」

そう言えばエステリーゼ様は？とセアヴィラが聞くとラピードと食べるものを探しに行ったらしい。彼女は元気良くその場で立ち上がった。

「倒れたばっかなんだ。もうちょいゆっくりしとけ」

『エステリーゼ様を放っておけないし、きっと早くフレンに追いつきたいって思ってるし』

へらりと笑いながら言うと、いつもより少し低めの声でユーリが話す。

「また倒れて、今度は一晩中起きなかったらどうすんだよ」

『…もしかして心配してくれてるの？』

「足手まといになるって意味だよ」

『で〜す〜よ〜ね〜』

はあ、と項垂れたセアヴィラだったが、直ぐにいつもの笑顔になる。それを見たユーリはふいっと彼女から視線を反らす。その時、エステリーゼが腕いっぱいニアの実を抱えて戻って来た。

「！ セアヴィラ！！ 起きたんですね！ 大丈夫ですか？」

『ああ、はい。大丈夫です。それよりエステリーゼ様、それは…』

「あ、美味しそうですね？ セアヴィラも食べます？」

『…それ、味見しました？』

セアヴィラが聞くとエステリーゼはふるふると首を振った。

『…食べてみます？』

冗談半分で言った言葉だったのだが、エステリーゼは本気にしたら

しくニアの実をひとつ手に取ってそれをかじった。

「……うっ！…セアヴィラ…！！」

『いやいや食べるって言ったのエステリーゼ様ですよ僕の所為じゃないですってば』

やはり苦かったのか、涙目でこちらをみる彼女に苦笑いをするセアヴィラ。

「はははっ、これで腹ごしらえはやっぱ無理か」

ユーリは落ちているニアの実を拾い上げながら言うと、セアヴィラも賛同する。確かにお腹は減ってるのだが流石にニアの実では食べた気にもならないだろう。

「セアラ、確かお前デイドン砦で食材買ってなかったか？」

『ん？ああ、買った買った！サンドイッチなら簡単に作れるかなって』

「じゃあそれでいいか」

セアヴィラが荷物を取り出すと、ユーリはそれを受け取って中身を確認する。

「ユーリは料理できるんです？」

「城のコックと比べんなよ。下町育ちで勝手に覚えた簡単な料理だから」

言いながらユーリは材料を並べ始めた。セアヴィラは何度か彼の料理を食べたことはあるが、一流のコック並みに美味しかった。

「∴フレンが危険なのにユーリもセアヴィラも心配ではないんです？」

「ん？そう見える？」

『そうですかねえ…』

聞き返すとエステリーゼは小さく頷いた。辺りに落ちてある木の枝を拾っていたセアヴィラは、あはは、と笑ってユーリを見やる。

『僕たちはフレンのこと、良く知ってますからね』

「だから実際、心配してねえからな。あいつなら自分でなんとかしちまうだろうし、あいつを狙ってる連中にはほんと同情するよ」

「え？」

ユーリの言葉にエステリーゼは不思議そうに首を傾げる。

「セアラは兎も角、オレはガキの頃から何やってもフレンには勝てなかったもんな。かけっこだろうが、剣だろうが。その上、余裕かまして、こう言うんだぜ？大丈夫、ユーリ？ってさ」

「羨ましいな…。わたしには、そういう人、誰もいないから」

「いても口うるさいだけだぞ」

『フレンはお母さんだからね』

セアヴィラは言いながら集めた木の枝に火を灯すと同時にユーリはサンドイッチを完成させた。嬉しそうに、セアヴィラとエステリーゼはそれを頬張った。

――
――
――

やがて食べ終わり、一息ついた一行は再び歩き出した。その途中、ラピードが低く屈み、前方の茂みを睨んで唸り始める。すると、ガサツ、と茂みが揺れた。

「ん？」

「エッグベアめ、か、覚悟！」

少年のような声が聞こえてた後、声の主であろう少年が茂みから飛び出して来た。彼は身の丈ほどの大きな斧を手にとっており、そしてそれを振り回し始める。しかしそれは誰に当たることでも無く、見えていたユーリは刀を鞘から抜いて少年の斧目掛けて振り上げた。その衝撃で尻餅について彼は止まる。

『…何、この子』

「ワフッ」

セアヴィラはユーリの鞆を拾いながら少年を見やると、ラピードが彼を覗き込んでいた。少年は酷く驚き、地面に倒れ込む。

「ボ、ボクなんか食べても、美味しくないし、お腹壊すんだから」

「ガウっ!!」

「ほ、ほほんとに、たたたすけて。ぎゃあああゝゝゝ!!」

はい、とユーリに鞆を渡しながらセアヴィラは溜め息を吐く。

『死んだふり下手すぎでしょ』

「忙しいガキだな」

怯えている少年にエステリーゼは、大丈夫ですよ、と優しい笑みを浮かべて歩み寄る。それを見た彼は漸く落ち着いたようだった。

「まったく。なにやってんだか」

ユーリは呆れたように言った。

「ボクはカロール・カペル！魔物を狩って世界を渡り歩く、ギルド？魔狩りの剣？の一員さ！」

その後、何故か彼、カロールに自己紹介をされた。いきなりのことにユーリとセアヴィラは顔を見合わせる。

「オレは、ユーリ。それにセアラとエステルと、ラピードだ。んじや、そういうことで」

『あ、もし呼ぶんだったらセアヴィラって呼んでね。そっちが本名だから。じゃ、ばいばーい』

仕方なくそれだけ言ってユーリとセアヴィラは踵を返す。そんなふたりに戸惑うエステリーゼだったが、慌てて追いかけてくる。

「へ?…って、わゝ、待って待って待って!」

言いながらカロルは先を行くユーリたちの前に立ちはだかる。

「君たちは森に入りたくてここに来たんでしょう? なら、ボクが…」

「いえ、わたしたち、森を抜けてここまで来たんです。今から花の街ハルルに行きます」

森を抜けて来たことにカロルは驚くが、直ぐにエッグベアという魔物を見なかったかと聞いてきた。

「セアヴィラ、ユーリ、知ってます?」

「さあ、見てねえと思うぞ」

『いなかったですねえ』

確かにここまで戦闘は何度もしてきたがエッグベアとは戦ってはいなかった。それを告げるとカロルは、そっか、と酷く落ち込んだ。

「なら、ボクも街に戻ろうかな……あんまり待たせると、絶対に怒るし……うん、よし！」

自分の中で何かを決心した彼は勢い良く顔を上げる。

「三人だけじゃ心配だから、魔狩りの剣のエースであるボクが街まで一緒に行つてあげるよ」

ほらほら、と自分は魔導器を持つてゐるからと鞆についてあるそれをアピールするが、三人の腕にある魔導器を見て少しばかり退がる。しかし彼は負けじと、鞆から本を取り出す。ユーリはそれを奪うかのように手に取り、開いた。それには魔物の情報が書かれていたのだが、途中から何も書かれていない白紙だ。それからユーリはちら

りと彼の斧を見やった。

「エースの腕前も剣が折れちゃ披露できねえな」

見れば彼の斧は途中でポツキリと折れており、気付いたカロルはそれを拾い上げて素振りを始める。その隙に一行は森の出口へと向かった。

「ちょ、あ、方向わかってんの？ ハルルは森出て北の方だよ。もお、置いてかないでよ」

叫ぶのを無視して歩くユーリたちの後を慌てて追いかけるカロルだった。

『結局勝手についてきてるし』

セアヴィラは魔物と戦いながらカロルをちらりと見やる。折れた斧で、しかも度胸も無いくせに良く戦うものだ。セアヴィラにとって

嫌いなタイプではないのだが、なんだかやるせなかった。

「ラピードって何者？犬なのに武器使うし、牙とか爪があるのに…」

「ウー、ワン！」

『ん？』

「爪とか牙使うのは犬の戦い方だしな」

戦闘後のふとしたカロルの問いにユーリが答える。その言いようにエステリーゼは驚いたように目を瞬かせる。

「ラピードは犬、ですよね？」

「ワンワン！」

『わっ、ちょ…！』

「ラピードはラピードって生き物だよ」

意味が分からないとカロルは顔を歪める。

「ガウッガウッ、ウォーン！」

『ひゃ、っラピード！』

「…何であれ、こいつは自分のこと犬だと思ってない。だから、武器も使って攻撃するし、道具も使う」

「でもだからと言って自分のことを人間だとも思っていない」

「…よくわからないけど…気位のようなものを感じます」

「ウォーン！」

『あはっ、や、もうっ、くすぐった、いよ、ラピード、ひゃあ！』

「……………って何やってんだよお前ら！」

いい加減、セアヴィラとラピードのじゃれあいに限界を感じたユーリは振り返って叫ぶ。ラピードはセアヴィラの上に乗る、尻尾で彼女の首筋やら脇やらをくすぐっていた。

「おいやめろラピードお願いだからやめてくれ」

「ワフツ」

ユーリは真顔だったが内心はかなり必死だった。ラピードはまるで仕方ないとも言うようにセアヴィラの上からおりる。

「ラピード、なんでセアヴィラにはあんなになつてゐるんでしょうか…」

「さあな」

ユーリは呆れるように息を整えてるセアヴィラを見やった。

――

――

――

「お喋り出来る仲間がいると旅も断然楽しくなるよね」

暫く歩いていると、突然カロルがそんなことを言い出した。

「もう、ひとりのときは、心細く…じゃなくて、退屈でさあ」

「ああ、そうだな。あ、カロル、後ろに魔物が」

誰がどっから聞いても棒読みなはずなのに、カロルはそれを本気にして慌てて飛び退いた。そんな掛け合いを見ていたセアヴィラは苦笑いをする。

『何かユーリ、楽しそうだなあ』

「急に賑やかになりましたね」

「ワン、ワン！」

『あ、あれ出口じゃない？』

そう言ったセアヴィラが指差す方には明るい光が差し込んでいる。やっとのことで森の外に出られたセアヴィラは、うーん、と思いつ

きり背伸びをした。

『よし、ハルルはここから北だったよねえ』

「あ、うん、そうだよ！」

そのまま北を向きながらセアヴィラは言う。すると、ふわり、と花びらが目の前を過ぎていく。見覚えのあるそれはハルルの象徴であるハルルの木のものだった。しかしセアヴィラは違和感を覚える。

『…なんでこんなに色褪せてるの…？』

傍に落ちた花びらを一枚拾い上げながらセアヴィラは呟く。ふと彼女の異変に気がついたユーリがそっと声を掛けてくる。

「セアラ、どうかしたか？」

『う、ううん！何でもないよ』

「？　　ならいいけど…」

セアヴィラは花びらをぎゅっと握り、誤魔化すようにいつもの調子に戻る。何だか変な感じはしたのだが、彼女は気にしないことにした。

「そう言えばセアラとユーリって付き合ってるの？」

『うん、良い質問だね。だがその前にその愛称で呼ぶの止めようか』

「Σうええ！？な、なんでさ！」

セアヴィラは真っ黒な笑みでカロールを見やった。そして真顔で言う。

『ユーリが付けてくれた愛称だから』

「意味分かんないよ！」

『とーにーかーくー！セアラって呼び方はユーリだけの特権なの！』

「オレだけって…フレンだって呼んでんだろが」

『た、確かにそうだけどー！』

「じゃあいいじゃん!！」

『なーんーでーだーよー!！!』

結局カロールからもセアラと呼ばれるようになったセアヴィラ。ぶつぶついいながらもいい加減終わらないので了承したのだった。

静寂なる呪いの森で

（ぐすん……ほんと、ユーリって意地悪だね……ま、そこが大好きなんだけど!）

05 花の街の枯れた大樹

ハルルの樹

それはとても幻想的で

美しい、桃色の花をつけていた

北を目指し歩いていた一行は、やがてハルルへと辿り着く。しかしそこにあつたのは嘗てセアヴィラが見たハルルでは無かった。鮮やかに桃色に色付いていたハルルの樹はまるで命を失ったかのように色褪せていたのだ。

「ここが花の街ハルルなんですよね？」

「うん、そうだよ」

確かにハルルには間違いない。この間まではこんな街じゃなかった

はずだ。そう思いながらセアヴィラはふと樹を見上げる。

「この街、結界ないのか？」

「そんなはずは…」

ふたりは空を見上げて確認する…が、やはり結界はなかった。

「三人ともハルルは初めて？」

『僕は何度か来たことはある。多分ふたりはそうだと思うよ』

「そっか。ならセアラ以外はハルルの樹の結界魔導器シルトプラスティアも知らないんだね」

「樹の結界？」

カロルの言葉にユーリとエステリーゼは街の中心にあるハルルの樹を見上げる。話の最中に視線を戻していたセアヴィラも再び樹を見た。

「？魔導器の中には植物と融合し、有機的特性を身に付けることで進化をするものがある？です。その代表が、花の街ハルルの結界魔導器だと本で読みました」

相変わらず何でも知っている彼女に感心するユーリ。

「で、その自慢の結界はどうしちゃったんだ？」

じつとハルルの樹を見ているセアヴィラにユーリは問い掛ける。彼女がぐるりと街を見渡し、辺りに座り込んでいる街の人たちを見て目を細めた。

『今は起動してないみたいだね…』

「毎年、満開の季節が近付くと一時的に結界が弱くなるんだよ。ちようど今の季節なんだけど、そこを魔物に襲われて…」

魔物は退治したのだが結界魔導器が壊れてしまったんだそうだ。その所為で樹が徐々に枯れはじめてるらしい。

「あ！」

突然声を上げたカロールに驚いたエステリーゼがどうしたのかと聞くと、彼は用事があったのだとセアヴィラたちから離れて行った。

「勝手に忙しいやつだな」

『ごめん、ユーリ。僕も勝手するよ』

「は？え、ちょ、セアラっ！？ってエステルもかよ！」

セアヴィラは燕尾服の裾を翻して怪我人の治療を始める。それを見たエステリーゼは我もと怪我人の元へと走っていく。

『大丈夫ですか？今、治療致します』

「！ あ、あの、ですが…私たちには…」

『お気になさらないで下さい。これは僕の好意ですので』

そうセアヴィラは柔らかく笑って治療を始める。そのまま次々と怪我人を治して行くセアヴィラとエステリーゼ。ユーリはそんなふたりを黙って見ていた。

「すごい…痛みがなくなった。あ、ありがとうございます。本当にありがとうございます」

「いえ、そんな、全然…」

『お怪我、大したことなくて良かったです』

全ての怪我人の治療を終えたふたりに感謝の言葉の雨が止めどなく降っていた。

「いやはや、これほどの治療術があったなんて…なんとお礼を言え
ばいいのか」

「いえ、本当にいいですから」

『僕たちは僕たちに出来ることをしただけですから、気にしないで

下さい』

「謙虚なお嬢さん方だ。騎士団の方々にも見習ってほしいものです」

一人の老人の言葉に賛同する言葉が飛び交う。それを聞いたセアヴィラは顔をしかめる。

本当に騎士団は帝国のことしか考えてないのだろうか。：いや、この現状を見る限りそうなんだろう。そんな騎士団だからこそユーリは退団し、セアヴィラもまた、辞めてしまおうと思ってしまったのだ。

「まあ、帝国の方々には私らがどうなろうと関係ないんでしょうな」

「うそ…そんなはずは…」

『…エステリーゼ様は知らないでしょうがこれが騎士団の現状なんです…』

耳打ちでこっそりと話すと彼女はバツとセアヴィラを振り向く。セアヴィラの表情は凄く悲しいもので、エステリーゼでもさっきの言葉が本当なのだと分かった。

「あ、でも、あの騎士様だけは違っていましたよね？」

「おお、あの青年か。彼がいなければ、今頃私らは全滅でしたわ」

彼らの言葉にセアヴィラとエステリーゼはもしかして、と顔を見合わせる。

「今年は結界の弱まる時期が早く、護衛を依頼したギルドが来る前に襲われてしまっていますな。偶然、街に滞在していた巡礼の騎士様ご一行が魔物を退けて下さったのです」

ユーリがその話を詳しく聞けば、その騎士はやはりフレンのようだった。エステリーゼは老人の元へ駆け寄り、まだ街にいるのかと問う。しかし彼らは結界を直す魔導士を探す、と当にこの街を去ったらしい。

「行き先まではわからないか」

「東の方へ向かったようですが、それ以上のことは…」

『東、ね…』

「そうですか…でも、ここで待っていればフレンは戻ってくるんですね」

「よかったな。追いついて」

会うまでは安心できませんけど、とエステリーゼは苦笑いする。

「ハルルの樹でも見に行こうぜ。セアラもエステルも見たいだろ？」

「あ、はい！」

『そう、だね…』

なんだか乗り気じゃないセアヴィラは坂の上にある樹を見詰める。
願わくば満開に咲いたハルルの樹をふたりに見せたかった。彼女は
思いながらもユーリを追う。

『あれ、あそこにいるのカロルじゃない？』

「あ、ホントですね」

ハルルの樹に向かう途中、つり橋の上にカロルの姿を見つけた一行は彼の方へ歩み寄る。

「満開に咲くハルルの花……。見せてあげたかったのに。そうすれば、きつと……」

何やらぶつぶつ呟いているカロルに声を掛けるがこちらには気付かないらしく、未だに何かを言っている。そんな彼を見たユーリはひとりにしてやろうと来た道を戻り出した。しかしふと足を止める。セアヴィラがひょいっとユーリの後ろから覗くと、目の前には三人の子供。彼らは魔物を倒すんだと意気込んでいた。

「あんな子どもまで……。早く、結界が戻ればいいのに」

ユーリは頷いて再びハルルの樹を目指して歩き始める。さっきの子供たちを気にしながらもセアヴィラとエステリーゼはユーリの後に続いた。

「近くで見るとほんと、でっけ」

ハルルの樹の下へ来たセアヴィラたちは聳え立つそれを見上げる。

「もうすぐ花が咲く季節なんですよね」

「どうせなら、花が咲いてるところ見てみたかったな」

『満開のハルルの樹は何よりも綺麗だよ』

「きっとそうでしょうね：満開の花が咲いて街を守ってるなんて素敵です」

確かにハルルみたいな場所はそうそうないだろう。樹が街を守ってる姿は凄く幻想的だ。セアヴィラはもう一度、その姿を見てみたいと思った。

「わたし、フレンが戻るまで怪我人の治療を続けます」

「なら、どうせ治すんなら、結界の方にしないか？」

「え？」

唐突なユーリの提案にエステリーゼは驚いたように振り向く。するとセアヴィラは考えるように顎に手をやり、やがて顔を上げる。

『…そうだね。うん、それが良いよ！流石ユーリ！！』

「え、えっ？」

セアヴィラは嬉しそうに跳び跳ねる。しかしエステリーゼはユーリとセアヴィラを交互に見て戸惑っていた。

「魔物が来れば、また怪我人が出るんだ。今度はさっきのガキたちが大怪我するかもしれないねえ」

『簡単に言えば僕もユーリもこのまま見過ごせないってこと』

「それはそうですけど、どうやって結界を？」

エステリーゼの言葉に、一度樹の根元に目をやって、なぞるように

上まで見上げるユーリ。

「こんなでかい樹だ。魔物に襲われた程度で枯れたりしないだろ」

『そう：別に他の理由がある、ってことですよ』

言いながら数歩、樹に近付く。見た目には何の変徹もないのだが、どこかに元凶があるはずだ。彼女がふと違和感を感じて地面に目を向けた時、先程の老人が何をしているのかと尋ねてきた。直ぐにエステリーゼが樹が枯れた原因を調べてると答えるが、老人によるとそれはフレンにも分からなかったと言う。

そんな中、坂を登ってきたカロルにエステリーゼが声をかける。

「あ、カロル！カロルも手伝ってください！」

「：なにやってんの？」

尋ねるカロルに先程のことを話せば、カロルはハルルの樹が枯れた理由を知っていると言う。それには彼が森で探していたエッグベアが関係しているらしいのだ。

「どういことだ？」

「土をよく見て。変色してるでしょ？」

言われてセアヴィラたちは地面に目をやる。確かに土は酷く変色しておかしかった。

「それ、街を襲った魔物の血を土が吸っちゃってるんだ。その血が毒になってハルルの樹を枯らしてるの」

『魔物の血…』

「その毒をなんとか出来る都合のいいもんはないのか？」

ユーリが聞くと今まででもそうだったのか、語尾が消えてしまいそうなくらいに、誰も信じてくれないよとカロルは話す。

「なんだよ、言ってみなって」

まるで子供（実際子供なのだが）を宥めるように、カロルの目線に合わせるユーリ。

「…パナシーアボトルがあれば、治せると思うんだ」

彼は顔を上げて呟くようにそう言った。

「パナシーアボトルか。よろず屋にあればいいけど」

「行きましょう、セアヴィラ、ユーリ！」

エステリーゼはいち早くその場から駆け出す。ふたりは顔を見合わせてから彼女を追った。

――坂を下りたつり橋の向こうによろず屋がある。しかしパナシーアボトルは売り切れており、エステリーゼは項垂れた。そんな彼女を見かねたセアヴィラが店の主人に問う。

『確か、素材があつたら合成出来るんだったよね』

「おお、良く知ってるね、お嬢さん」

「何があれば作れる？」

パナシアボトルを作るには、エッグベアの爪、ニアの実、ルルリエの花びらの3つが必要だ。ニアの実は森でエステリーゼが拾ってきた大量の果实。

「エッグベアは？」

『僕は本でならななく見ましたが詳しくは分からないです』

店の主人によると魔物狩りを生業にしている魔狩りの剣の人間がいればわかるらしい。その瞬間、頭にはカロルのことが浮かんた。

「あいつ、そのために森にいたのか…」

『エッグベア覚悟〜とかも叫んでたし間違いないね〜』

言いながらちらりと後ろを見やると、物陰に隠れるカロルの姿が見え、セアヴィラは小さく笑う。

（ちょっと見直したかなあ）

次にルルリエの花びらのことを聞くと、それはハルルの樹の花びらのことだと分かった。普段はルルリエの花びらではなく魔導樹脂を使うのだが、この辺りにはないらしい。

『うーん…でもこの花びらじゃ使えないしなあ…』

セアヴィラは拾った花びらを指先でくると回しながら言う、もしかしたら長が持つてるかも、と店主が教えてくれた。一行はお礼を言ってからよろず屋を後にする。

そこから少し歩いたつり橋の近くにカロルの姿を見つけ、セアヴィラは足取り軽く彼に近付く。

『カーロル!』

「! セアラ…」

『なーに悄気てんのさ! ほくら、さっさとクオイの森に行くよ!』

「え？」

その言葉に目を丸くするカロル。軽く屈んで、バシバシ、と背中を叩くと彼は恐る恐るセアヴィラを見やった。

「パナシーアボトルで治るって信じてくれるの…?」

「嘘ついてんのか？」

カロルは首を振る。そんな事を聞かなくてもユーリもセアヴィラもエステリーゼも、彼が嘘をついてるだなんて思ってなかった。彼の目は真っ直ぐだったから。

「だったら、オレたちはおまえの言葉に賭けるよ」

「ユーリ…も、もう、しょうがないな。ボクも忙しいんだけどね」

照れるカロルの頭をセアヴィラが優しい笑みを浮かべながら、ポンポン、と叩くと彼は真っ赤になった。

「決まりですね！わたしたちで結界を直しましょう」

「エステルも来るの？」

カロルが聞くと当たり前な顔で当たり前じゃないですかとエステリ―ゼは言う。

「フレン待たなくていいのかよ」

「治すなら樹を治せて言ったのはユーリですよ」

「なら、フレンが戻る前に樹治して、びびらせてやろうぜ」

にっこりと笑ったエステリーゼにつられてセアヴィラも笑顔になった。

一行は長、先程の老人にルルリエの花びらを貰った後、再びクオイの森に足を踏み入れる。

「ねえ、疑問に思ってたんだけど、三人：ラピードもんだけど、なんで魔導器持ってるの？普通、武醒魔導器ボーディブラステイアなんて貴重品、持っていないはずんだけどな」

突然、前を歩いていたカロールが振り返ってそんなことを聞く。ユーリは顔をしかめてカロールを見る。

「カロールも持ってんじゃない」

「ボクはギルドに所属してるし、手に入れる機会はあるんだよ。魔導器発掘が専門のギルド、？遺構の門ルインズゲート？のおかげで出物も増えたしね」

へえ、とユーリは感心したように呟く。

「遺跡から魔導器掘り出してゐるギルドまであんなのか」

確かにそうでもしないと帝国が牛耳る魔導器を個人で入手することは不可能。それに古代文明の遺産である魔導器は、有用性と共に危険性を持つため、帝国が管理をしているのだ。

「魔導器があれば危険な魔術を、誰でも使えるようになりますから、無理もないことだと思います」

「やりすぎて独占になってるけどな」

『あはは、そりゃごもつともな意見だねえ。あれは僕にもどうにも出来ない問題だわ…』

騎士団の中では、地位は誰よりも上かもしれない。しかしガーディアン守護役と言う役職上の決まりで騎士団の内情には文句を言えないことになっている。あくまで名目は皇族であるエステリーゼを守ることなのだから。

「で、実際のところどうなの？なんで、持ってんの？」

「オレ、昔騎士団にいたから、やめた餞別にもらったの。ラピードのは、前のご主人様の形見だ」

「餞別って、それ盗品なんじゃ。…えと、エステルは？」

「あ、わたしは…」

カロルはユーリのことにはあまり触れず、次にエステリーゼに聞く。しかし本当のことは言えるはずもなく、彼女は戸惑う。

「貴族のお嬢様なんだから魔導器ぐらい持ってるって」

「あ、やっぱり貴族なんだ。ユーリと違って、エステルには品があるもんね。じゃあセアラも貴族？」

ユーリのフォローにほっとしたセアヴィラはいつもの調子で答える。

『まあそんな感じ？でもこの魔導器は僕が騎士団員だから持っているだよ』

「きつ騎士団員！？嘘っ！？セアラが！？」

飛び退く勢いでカロルは驚く。確かに彼女は見た目も中身も騎士団とは程遠い。故に自分や知っている周りの人から騎士団員だと言わないとわからないのだ。

「…でもセアラって他の騎士団とは全然違うよね…何て言うか…自由？」

『そりゃそ〜だよ。僕、騎士団嫌いだし』

「じゃ、何で騎士団なんかにいるのさ」

カロルの言葉にセアヴィラはユーリとエステリーゼを交互に見やる。そして目を瞑って細く長く息を吐いたセアヴィラは、真っ直ぐに前を見据えた。

『……守りたい人がいるから』

「！」

珍しく真剣な表情のセアヴィラにみんなは目を丸くする。しかし彼女は直ぐにへらりと笑った。

『理由なんてそれだけで十分だよ』

「…そっか。なんかセアラらしいね！」

そうかなあ、とセアヴィラは照れるように頬を掻く。

『んじゃま、時間も惜しいし、そろそろ行きますか』

セアヴィラは元気良く足を進める。そんな彼女の背中をじっと見て、ユーリは小さく笑ってからゆっくりと後を追った。

——やがて、この間エステリーゼが大量に持ってきた、ニアの実が落ちている場所に着いた。ユーリはそれを拾い上げる。

「あとは、エッグベアの爪、だね」

「森の中を歩いて、エッグベアを探すんです？」

「それじゃ見つからないよ」

「なら、どうすんだ？」

するとカロルはニアの実を一つ手にとり、エッグベアの解説をしていく。エッグベアはかなり変わった嗅覚の持ち主なんだそうだ。そして突然ニアの実を燃やした瞬間、とてつもない異臭が嗅覚を襲った。

「くさっ！！おまえ、くさっ！」

『カロルくっさ！』

その臭いにセアヴィラとラピードは咄嗟にその場から離れる。嗅覚が優れているふたりにとってその臭いは耐えられそうになかった。

「ちょ、ボクが臭いみたいに！」

カロールがユーリ立ちに近付くが、やはり近くで匂ぐのが嫌なのか、ふたりは後退りする。

「先に言っておいて下さい」

『ラピード…僕、お花畑がみえ、るよ…』

「クウ…ン…」

セアヴィラとラピードは限界に達したのか地面に倒れ込んだ。慌ててエステリーゼが駆け寄り、内心、ユーリも慌てながらセアヴィラの傍にしゃがみこむ。

「みんな警戒してね！いつ飛び出してきたもいいように。それにエツグベアは凶暴なことでも有名だから」

「その凶暴な魔物の相手はカロール先生がやってくれるわけ？」

臭さに悶えているセアヴィラの頭に手を乗せながらユーリはカロールを見やった。彼は振り返って当然だと胸を張る。…でもユーリも手

伝ってよ、と言う彼は、やはりどこか頼りなく感じた。

「わたしもお手伝います。ほら、セアヴィラとラピードも」

『僕マジ無理ですどうにかなっちゃいそう』

本気で今にも意識が飛んでいきそうなセアヴィラ。鼻を摘まんで唸っている、ユーリは溜め息を吐いてセアヴィラを肩に担いだ。

「仕方ねえから担いでってやる」

『ユーリ……どうせならお姫様抱っこがい…あだっ!?!』

「放って行くぞ」

『ごめんなさい』

調子に乗って言うど地面に落とされたセアヴィラ。素直に謝ると、ユーリは屈んで背を向ける。セアヴィラはきよとしたが、直ぐに嬉しそうに彼の背に飛び乗った。

花の街の枯れた大樹

（はうっ！！…ああダメだ本気で鼻曲がる…後で絶対にぶっ叩いてやる…）

（ユーリ…死にそう）

（そうか）

（死ぬ前に結婚して）

（落とすぞ）

（ごめんなさい）

（…なに、あれ）

（…さあ…）

（クウーン）

06 満開に咲く桃色の花

ひらひらと舞い散り

ひとつの街を包み込む

桃色の花びら

あれから一行は警戒しながら森の中を歩いていた。相変わらずセアヴィラは鼻を摘まんでユーリの背に乗っている。セアヴィラは幼い頃から嗅覚、聴覚、視覚、味覚、触覚：つまり五感が人一倍優れているのだ。嗅覚と聴覚は犬であるラピードより良いのではないかと言われている。

「大丈夫か、セアラ？」

『うーん…カロールが臭い…頭ガンガンする…』

「だーかーら！ごめんってば！」

未だに臭う異臭にセアヴィラが唸る。次の瞬間、低い唸り声が周囲に響いた。

「…セアラか？」

『ちがうよ！』

思わず突っ込んでしまったセアヴィラはハッとして、まさか僕が突っ込むなんて、と額に手をやった。そして彼女は気合いで意識をはっきりとさせ、ユーリの背中から降りる。

『エッグベアかな…』

茂みを見て呟くとガサツと音を立てた。カロールは咄嗟にセアヴィラの後ろに隠れる。

「き、気をつけて、ほ、本当に凶暴だから…！」

「そう言ってる張本人が、真っ先に隠れるなんて、いいご身分だな」

『さっきといい今といい…』

「エ、エースの見せ場は最後なの！」

呆れるユーリとセアヴィラにカロルは慌てて弁解をする。溜め息を吐いたふたりは再び茂みに目を向ける。すると出てきたのは小さなプチプリだった。

「…これは、違いますよね？」

直後、その後ろからエッグベアが姿を表す。それを見たカロルは大声を上げる。

「こ、これがエッグベア…？」

カローは勢い良く首を縦に振る。

『わゝ本で見たのと一緒にだゝ』

「成る程、カロー先生の鼻曲がり大作戦は成功ってわけか」

「へ、変な名前、勝手に付けないでよ！」

『実際僕は鼻曲がったよカロー先生』

ユーリとセアヴィラが武器を構えると、エッグベアは殺気を出して襲い掛かってきた。

「うわああ！」

『?フレアショット?!!!』

セアヴィラが双銃から交互に放った銃弾が命中し、エッグベアは爆発の勢いで後退する。

『何やってんの、早く構えて!』

「う、うん!」

叱られたカロルはもたもたしながらも鞆から武器である斧を取り出す。それを確認したセアヴィラは直ぐにその場を飛び出した。

『エステリーゼ様、援護をお願いします!』

「! はい!」

肩越しに言うエステリーゼは詠唱を始める。ふ、と突然セアヴィラの上に影が落ちた。しかし直ぐに反応した彼女は咄嗟に後方に飛び上がる。同時にエステリーゼの詠唱が終わった。

「刃に宿れ、更なる力よ…? シャープネス?!」

『貫け!? ガトリングバレット?!!』

セアヴィラはそのまま宙で回転しながら銃弾をエッグベアに打ち込む。その隙にユーリとカロールが攻める。

「？三散華？！！」

「？臥龍アツパー？！！」

彼らの攻撃は効いてるのだが、エッグベアは身体を大きく回し、ユーリとカロールを振り払う。

『！ エステリーゼ様！！』

「きゃ…！」

エッグベアはそのままエステリーゼに向かっていく。セアヴィラは勢い良く走りだし、エッグベアを回し蹴りで吹っ飛ばす。しかし着地の際に足を捻ってしまった。

『っ！』

「っんの、バカ！」

それを見たユーリは自分の剣をエッグベアに向けて投げ、それは深々とそいつの腕に突き刺さった。セアヴィラはそれを見逃さず、銃弾を打ち込み、足を引き摺りながらその場を離れる。

『カロール！詠唱の時間稼いで！』

「ボ、ボクが！？」

『今君以外誰がいるって！？』

言い終えるや否や、セアヴィラは詠唱を始める。そんな中、ウルフとアックスピークが飛び出して来た。ハツとした彼女がそちらを振り向くと、そこにはエステリーゼが魔物と向き合っている姿。

『エステリーゼ様！！』

「こちらは任せて下さい、セアヴィラ！」

『っ！…分かりました！』

彼女が戦うと決めたならば止める権利はない。それが守護役である
セアヴィラのモットーでもあった。

セアヴィラは再び詠唱に移る。その間にユーリはエッグベアの腕から剣を引き抜き、カロールと共に戦っていた。

『大地の咆哮、それは怒れる地竜の双牙！？グランドダッシャー？
！！』

やがて詠唱を終えたセアヴィラの双銃から放たれた銃弾がエッグベアの真下の地に命中する。そこに魔法陣が展開し、地面から出た鋭利な岩がエッグベアを襲う。

『ユーリ！！』

「ああ！」

ユーリに向かって叫ぶと、彼は剣を握り直し、エッグベアにとどめ

を刺す。エッグベアは地鳴りを立てて倒れ、絶命した。さらにエステリーゼもラピードと共同し、ようやく魔物を倒し終える。

『さっすがユー…』

「お前バカか」

『Σあいたっ』

振り返ったユーリは突然セアヴィラの頭をぶっ叩いた。セアヴィラは叩かれた部分を擦りながらへらりと笑う。その笑顔を見たユーリは仕方無さげに溜め息を吐いた。

「まったく…さっさと足、治せよ」

『はーい』

セアヴィラは捻ったであろう足に手を翳して治療していく。そんな彼女をエステリーゼはじっと見て考えていた。何故自分の治癒術は彼女に効かなかったのか。しかもまるで拒絶されたようにセアヴィラの体調が悪くなった。

『大丈夫ですか、エステリーゼ様？』

「え、あ、はい！」

『なら良かったです』

言いながら倒れたエッグベアに近付く。

『カロールセンサー、これどーやって取るの？取ってよ』

「え！？だ、誰でもできるよ。すぐ剥がれるから」

弱腰のカロールに対して溜め息を吐いてからセアヴィラはしゃがみこむ。それを見たエステリーゼが、自分も手伝わせて、と言ってきた。しかし倒したエッグベアを見て気持ち悪くなったらしく、慌てて口元を押さえる。

「エステルは周囲の警戒な」

「は、はい」

どうやって取るのかなあ、とセアヴィラが奮闘してる中、もう動かないよね、と恐る恐るエッグベアに近付くカロール。その後ろにユーリがこっそりと回る。

「うわああああっ！」

「ぎゃあああ~~~~っ！」

セアヴィラが何事かと振り向けば、どうやらユーリがカロールを驚かせていたようだった。寧ろセアヴィラはユーリよりカロールの声に驚いたのだが。

「驚いたフリが上手いなあ、カロール先生は」

「あ、うっ…はっはは……そ、そう？あ、ははは…」

当たり前にフリじゃなくて素なんだろうなあなんて思いながらセアヴィラがエッグベアの爪弄っているといつの間にかそれは剥ぎ取れていた。

『お、取れてた』

「んじゃ、戻ろうぜ」

そして一行は再び森の出口へ向かって歩き出した。

「ユーリ・ローウェル！森に入ったのはわかっている！素直にお縄につけい！」

森の出口に差し掛かった時、聞き覚えのある叫び声が聞こえてきた。セアヴィラとユーリは顔を見合わせてお互い嫌な顔をする。

「この声、冗談だろ。ルブランのやつ、結界の外まで追って来やがったのか」

『あいつ、しつこさだけは一丁前だからね』

「え、なに？誰かに追われてんの？」

興味津々気にカロールが問い掛けてくる。ユーリは肩越しに彼を振り返りながら、騎士団に追われていると話した。

「またまた、元騎士と現騎士が騎士団になんて…」

彼は笑って言うが、ユーリもセアヴィラも呆れたように苦笑いしながら顔を合わせた。それを見てカロールはさっきのユーリの言葉が本当のことだと悟る。

「…ねえ、何したの？ 器物破損？ 詐欺？ 密輸？ ドロボウ？ 人殺し？ 火付け？」

「脱獄だけだと思っただけ…ま、とりあえず逃げようぜ」

『あ、ちょっと待って！』

森から出ようと一歩踏み出したとき、セアヴィラが辺りの茂みをかき集め始めた。

「何してるんです？」

『ちよつとでも足止めになるように、です』

「だ、だめですよ！無関係な人にも迷惑になります！」

「誰も通りゃしないよ。なんせ、呪いの森だからな」

確かに、とエステリーゼは呟く。やがてこの先に道なんてないという程に茂みを集め終わったセアヴィラは満足げに微笑んだ。

『んじゃ戻ろうか』

それから森を出て、やっとハルルへと戻ってきた一行。直ぐ様よろず屋でパナシアボトルを合成し、いまは樹の元に来ていた。

「カロール、任せた。面倒なのは苦手だね」

「え？いいの？じゃあ、ボクがやるね！」

カローは嬉しそうにハルルの樹の根本に向かって行く。それを微笑ましく、エステリーゼは見ていた。

「カロー、誰かにハルルの花を見せたかったんですね？」

「たぶんな。ま、手遅れでなきやいいけど」

『…そうだね』

そうセアヴィラが呟いた直後、淡い光が辺りを照らし、視線が一斉にそちらに向けられる。村人たちは祈るようにその光を見ていた。

しかし、その光は期待を裏切るように消えていく。やっぱり、とセアヴィラはハルルの樹を見上げて思った。市販のもので簡単に治せるわけではない、と。

『（期待はしていたんだけど）…!?!?』

不意に頭が揺らいだ。

「うそ、量が足りなかったの？それともこの方法じゃ……」

「もう一度、パナシアボトルを！」

訴えるようにエステリーゼが言うが、ルルリエの花びらはもう残ってはいない。パナシアボトルは作れないのだ。

『……もう一度、美しき大樹よ……』

ぼつり、とユーリの隣でそんな声が聞こえた。ユーリとエステリーゼはふとそちらに視線を向ける。そこにはいつもは透き通った翡翠の瞳が虚ろになったセアヴィラの姿。

「セアラ……？」

『……逆流……』

不意にセアヴィラの体が輝き出す。誰もがその光景に息を飲む。刹那

那、彼女は腰から銃を抜いてエステリーゼに向け、――撃った。突然のことに誰も反応は出来ず、その弾はエステリーゼに直撃し、彼女は地面に倒れ込んだ。

「エステル!!」

『…相反する力とは言えど、満月と新月は表裏一体のもの』

「セアラ、さっきから何を言って……」

『――え、あ…何、僕は…いま何を……っ、エステリーゼ、様…』

ユーリに触れられたセアヴィラはハッとし、何をしたか分からないとでもいう素振りを見せる。しかしその瞳は僅かに揺らいでおり、自分がしたことを理解しているようだった。

「ちょっと、エステル!」

「…あ、あれ?……大丈夫、みたいです」

駆け寄ったカロールがエステルに声を掛けると、彼女は何も無かったかのように立ち上がる。それを見たセアヴィラの体から一気に力が

抜けた。

「セアラ！」

『……っ』

慌ててユーリが支えようと、その身体が震えているのが分かった。こんな彼女を見るのはいつ以来だろうか。そんな二人を見ていたエステルが何かを感じた。

「…もしかして」

「え、何…？」

次につい、と樹を見上げた。そして彼女は祈るように手を組む。

「お願い…」

そう呟いたエステリーゼから淡い光が発光する。

「エステル」

『エ、ステリーゼ、様…』

それは聖女のように清廉で、全てを包み込むような暖かな光を纏っている。エステリーゼは想いを込めて次の言葉を紡ぐ。

「咲いて」

瞬間、彼女から光が放たれ、幹を伝って樹の天辺で弾けた。そこからは雪のように光が舞い降り、そして……

『色褪せていた、ハルルの樹から…命を感じる……』

光が街を包み込む。それは急速に木々の成長を早め、ハルルの樹さえも命を吹き返した。それに伴い、街の結界魔導器が発動された。

ふわり、ふわりと花びらが舞う。踊るように落ちてくるひとつは、セアヴィラの手のひらに救われた。それを見てから、満開になったハルルの樹を見上げる。その姿は今まで見た何よりも美しく、そして何よりも壮観であった。

「…すげえな、エステル。立てるか？」

「あ、はい」

自分でも何をしたか分からないエステリーゼ。立ち上がってから、不思議そうにハルルの樹を見詰めていた。

「フレンのやつ、戻ってきたら、花が咲いてて、ビックリだろうな。…ざまあみろ」

『そうだ、ね……っ!?!』

ドクン、と心臓が一段と跳ねた気がした。そして再びあの感覚が襲ってくる。身体の中を何かが這いずり回っているような、掻き乱されるような、あの感覚が。

『あ、…は…つく……っ』

「セアラ…？」

セアヴィラの異常にエステリーゼと話していたユーリがいち早く気付く。そつと顔を覗き込むと、彼女は真っ青な顔で冷や汗を垂らしていた。

「おい、しっかりしろセアラ！」

『大、丈夫…っ。あは……心配、してくれ、てる…んだあ…。嬉、しいな…』

えへへ、と無理矢理笑って見るがユーリの表情は変わらなかった。彼はそんな彼女を見ていられなかったのかふわり、と横抱きにした。

『え、ちょ…え？』

「気分悪いんだろ？じゃ、大人しくしてろ」

『あ……うん…、ごめん、ね…』

いつもなら嬉しすぎてテンションが可笑しくなるんだけど、いまは
それどころではなくて。何だか妙にユーリの体温が心地よくてセア
ヴィラの意識は闇の底に堕ちていった。

――

――

――

彼女は夢を見た。怖い、夢。それは昔、まだ幼かった頃。ユーリを
危険な目に遇わせてしまったこと。

『また、か…』

原因のひとつはセアヴィラの力が暴走してしまったことにあった。
しかし彼女はその力を知らない。故に無意識に力を抑え込んでいた
のだ。原因が分からなかったセアヴィラは自分が弱かった為に、ユ

ーリを命の危機にさらしてしまった。そう思い込み、セアヴィラは一度二人から離れた。だから彼女は強くなりたいと願い、騎士団の門を叩いた。

ほんとは凄く繊細で傷付きやすい彼女が、何故いつも気丈に振る舞っているのか。それは過去の記憶にあった。もう二度と大切な人に傷付いて欲しくない。だから自分が守るんだ、と。

傷付くのは自分だけでいい。ずっとそんなことばかり考えていた。だからあの時、ザギの攻撃からユーリを守った。いや、長年の条件反射というやつなのだろう。気付いたら彼らの間に立っていたのだから。

『……さーて、行きますか!』

突然、元気に飛び起きて見れば、茫然としているユーリたちの顔が目に入った。辺りはまだ暗いため、少ししか時間が経ってないことが分かった。

「行きますか、ってお前、身体は…」

「そ、そうですよ！この間だってさっきみたいに苦しそうにしてたじゃないですか！」

『ユーリの愛で治った。あと寝たから』

「なんて単純な…」

セアヴィラの発言ひとつで緊迫した空気が軽くなった。みんながどれだけ心配してくれたか分かる。だからこそこれ以上心配させたくなくて気丈に振る舞うセアヴィラ。

『ってかハルルから出ちゃったんだね。もう少し見ていたかったんだけどなあ』

「悪いな。城で会ったあいつ……ザギの姿を目にしたから早めに街を出ようってことになったんだ」

『あああの痛い奴ね。どうせならぶっ殺……一発銃弾ぶちこみたかったよ』

爽やかな笑顔で言うセアヴィラにカロルは恐怖を覚えたとかなか。そう言ってからボサボサになった緑の髪を手櫛で整えて立ち上がった。

『とりあえず街からどのくらい離れた？ってかなんでカロールが着いてきてんのさ。まあいいけど。で、東に向かうの？』

「いっぺんに聞いてくんな。：まああれから直ぐに街を出たからそんなに離れてねえと思う。カロールは：まあ成り行きだ。行き先は東だな。東にあるアスピオって街を目指す」

『小言を言いながらも答えてくれるユーリが大好きです！』

「分かった分かった」

相変わらずのセアヴィラのテンションに、少し安堵の色を顔に浮かべるユーリ。そんな様子を見ていたエステリーゼとカロールはお互い顔を見合わせて笑った。

それから一行は再び歩き出す。

「ユーリはさ、セアラのことどう思ってるの？」

「は？…なんだよ、いきなり」

その途中。カロールが、少し前を歩いてエステリーゼと話しているセアヴィラをみてユーリに問う。

「だってセアラってユーリにいつもあんな調子じゃん？だからセアラのユーリに対する気持ちは分かるんだけど、ユーリってばいつもセアラのこと軽くあしらってて分かんないんだもん」

「お子様は知らなくていいんだよ」

「教えてくれたっていいじゃん！」

はぐらかすユーリの服をガシツと握って訴えかけるカロール。ユーリはふとセアヴィラを見てからため息を吐く。

「あいついつもあんなんだろ？語尾とか、だよ、って伸ばしてんじゃない。それが巫山戯てるようにしかみえない。だからスルーしてんの」

「それ、答えになってないよ。じゃあ好きと嫌いで言うならどっちなのさ！」

「好きか嫌いねえ…（…最近のガキってこんなにませてんのか？）」

カロルのしつこい問いに眉間に眉を寄せながら彼女を見てると、視線に気が付いたのかこちらを振り向くセアヴィラ。ユーリをみた彼女はにっこりと微笑んだ。

「……………どっちかっていうと」

「え？」

「なんでもねえ」

「ちょ、ちょっと、ユーリ！」

ユーリはハツとして歩く速度を早めた。そしてセアヴィラの横を通り過ぎた時……

「…ま、好きなんじゃねえの？」

そう呟いた。しかしそれは誰に聞こえる事なく闇夜に消えた。

満開に咲く桃色の花

（僕の中に僕以外の存在を感じるんだ）

（そう言えばユーリにお姫様抱っこされたんだよね！うへえ幸せだよ）

（今更かよ）

（だってあの時はあんな状態だったんだしい）

（……そう言えばおまえ、エステルに何をしたんだ？）

（え？）

（なんか呟いた後、銃でエステルのこと撃ったじゃねえか）

（ああ！？そう言えば！申し訳ありませんエステル様！！あなた様に銃を向けるなんて守護役^{ガーディアン}として失格です！どんな処罰でも受ける覚悟があります！！）

（いえ、気にしないでください。もしかしたらあれがあったから、樹が蘇ったのかも知れませんし。わたしも何をしたかのかは覚えてないんですけどね）

（エステル様：僕は一生あなた様に仕える所存です！…とはいえ、僕も記憶が曖昧なんですよね…）

（ま、終わったことはいいいんじゃねえの？無事樹が復活したんだし）
（ふたりのお陰だね！）

(…自分の力に疑問を持つなあ…)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8485y/>

星屑明星～テイルズオブヴェスペリア～

2011年12月3日13時53分発行